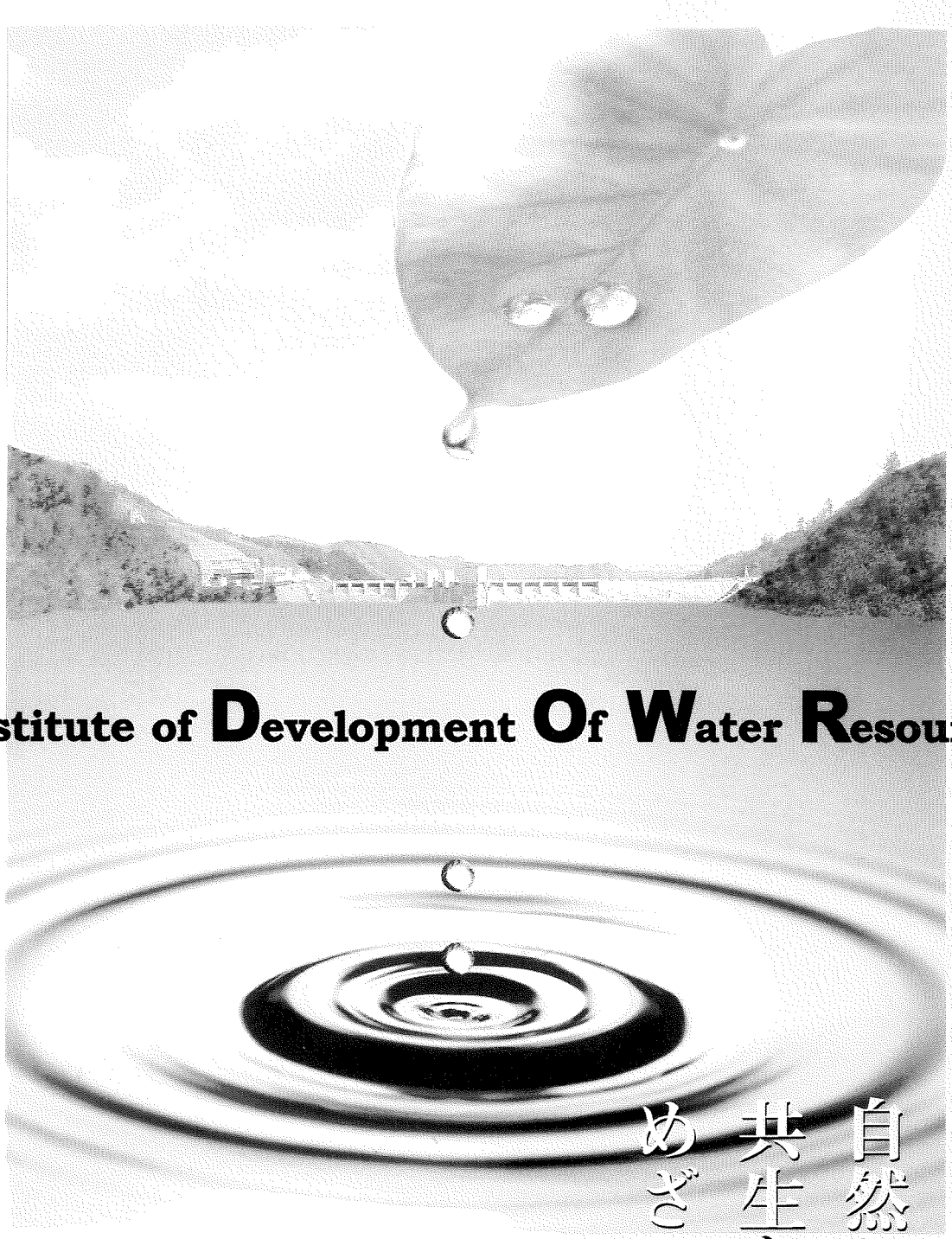
地質学雑誌　第110巻　第1号（通巻1300号）付録　昭和27年6月10日第三種郵便物認可　平成16年1月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 *News*

Vol.7 No.1 January 2004

THE GEOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN 1893



アイドールエンジニヤリング株式会社

本　社：〒166-0011 東京都杉並区梅里1-7-7(新高円寺ツインビル)　TEL.03-5306-3737(代)　FAX.03-5306-3288

IDOWR

日本地質学会*News*

Vol.7 No.1　January 2004

The Geological Society of Japan *News*
日本地質学会/〒101－0032　東京都千代田区岩本町２－８－15
井桁ビル ６Ｆ
編集委員長　大友幸子
TEL　03－5823－1150　FAX　03－5823－1156
main@geosociety.jp（庶務一般）
journal@geosociety.jp（編集）
http://www.geosociety.jp

Contents

2004年年頭にあたって
地質学の挑戦（会長　平　朝彦）……2

公示　日本地質学会2005年度
会長・副会長および代議員選挙について……3
2005年度会長・副会長および代議員選挙実施要領
日本地質学会選挙細則
日本地質学会選挙内規
立候補者届出用紙

日本地質学会第111年学術大会（千葉大会）について
（トピックセッション・シンポジウムの募集）……6

表紙紹介：
島根県，佐田町・横見埋没林（福岡　孝ほか）……7

報告……9
日本学術会議第18期海洋科学研究連絡委員会（第10回）議事録/日本学術会議第19期第１回地質科学総合研究連絡委員会環境地質学専門委員会議事録/2003年度第３・４回自然史学会連合運営委員会議事録

公募……11
筑波大学地球科学系教官公募/北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻教官公募/東京大学地震研究所教官公募

紹介……12
新編火山灰アトラス［日本列島とその周辺］　町田　洋・新井房夫著（氏家　宏）

学協会・研究会報告……13
ネパールの自然災害問題に関する国際セミナー（吉田　勝・V. Dangol）/第５回IGCP434国際シンポジウム（タイ）報告（坂井　卓）

CALENDER……15

出版物在庫案内……16

The Island Arc新編集長就任挨拶（石渡　明・Simon Wallis）…17

地学教育のページ……18
第４回こどものためのジオカーニバル報告（芝川明義）

院生コーナー……20
地球深部探査船「ちきゅう」見学記（大岩根　尚）

支部コーナー……21
2004年中部支部年会のお知らせ

追悼……22
山本博達学兄をしのぶ（唐木田芳文）

学会記事……23
2004年度第４回理事会議事録
2004年度第５回理事会議事録
2004年度第２回定例評議員会議事録

学会ホームページに
会員限定のページが出来ました.

理事会・評議員会議事録や役員選挙の広報など，学会運営に関する情報を会員の皆様に随時お知らせいたします．限定ページをご覧になるには，下記のIDとパスワードの入力が必要となります．

URL　http://www.geosociety.jp/member
ID：geosociety　　パスワード：gsj

ここをクリック

広告取扱：株式会社廣業社
〒104－0061 東京都中央区銀座8－2－9　電話 03－3571－0997　　印刷・製本：日本印刷株式会社

2004年年頭にあたって

地質学の挑戦

平　朝彦
日本地質学会会長

世の中の変化が目まぐるしい．急速な変化は確実に学術や教育にも大きな影響を与え始めている．競争の原理が導入され，評価が重要な淘汰選択の手段となり，その結果が政策や財政判断の基礎として取り入れられるようになった．企業だけでなく，大学も，学校も，研究所も，ほとんどの場所で同様な手法が導入されている．現場は対応に追われ，生き残りに精一杯であり，周囲を見る余裕が無くなってきた．すべてが自己中心となり，局所的なサバイバルだけが目標となってきた．そして，そこに様々な管理や規制が蔓延ってきた．本当にこれで良いのだろうか．

科学には黄金時代があった．20世紀の初頭，原子物理学や相対性理論が建設されていった時代である．その時，光り輝く研究所が存在していた．ケンブリッジ大学のキャベンディシュ研究所である．ラザフォードの原子物理学の時代からワトソン・クリックのDNA構造の決定まで,キャベンディシュ研究所からは多数のノーベル賞受賞者を輩出したのは良く知られている．なぜこのような素晴らしい成果が上がったのだろうか．いろいろな理由があると思うが，２つの点を上げることができる．研究所は自由（好きな事ができる）で，そしてそこに人（色んな才能の刺激がある）が集まってきたからである．人が集まるには理由がある．そこが魅力的だからである．なぜ，魅力的かと言えば，そこに優秀な人が居て，そして自由だからである．ここでは，人々は科学に酔っていたと言って良い．

殆どまったく同じ事が1980年代に起った．シリコンバレーである．ビル・ゲーツ，スティーブ・ジョブスなどIBMに対抗してベンチャー企業を起こし，パソコンとそのソフトを作っていった世代．シリコンバレーは自由であり，また，人が集まってきた．そこには管理や規制というものはほとんど無かった．ここでは，人々は熱に浮かされていた．

しかし，キャベンディシュ研究所にもシリコンバレーにも，激烈な競争は存在した．人々はサバイバルを賭けて戦ったし，そして多くの敗れ去ったものがいた．しかし，その競争もまた，自由であり，自発的なものであった．自ら進んで競争したのである．決して，お仕着せのものでもなく，政策的に決められたものでもない．自由であれば，また，競争も起る．当然である．科学や技術とは本来そういうものであるからである．

現在，我が国の基礎科学を取り巻く環境はどうであろうか．キャベンディシュ研究所やシリコンバレーのような状況は存在するのだろうか．残念ながら，そのような場所や分野が存在するとは言えない．私が一番恐れるのは，現在，盲目的に導入されている競争原理や評価システムが，科学や技術の本来持つべき環境を阻害しているのではないか，ということである．地質学は，基礎的な分野から応用的な分野を擁し，さらに自然と密接に結びついて教育の原点も含んでいる．このような幅広い分野を視野の狭い，短期的な効率性や生産性だけで評価するのは困難であり，真っ先に攻撃の対象となる可能性がある．では，どのように対応したら良いのか．唯一の方法は，自らの力で，プレッシャーを撥ねのけることである．

今こそ，挑戦の時と考える．地質学は，自らの手で熱気をつくり出さねばならない．大学でも，学校でも，企業でも，好きな事，今，重要と思うことを推進すべきである．積極的に他の分野や世界と交流すべきである．幸いにも，我々はそのための手段を手に入れつつある．学会の法人化は，会員の活動の自由化，活発化を促すためにある．統合国際深海掘削計画（IODP）と科学掘削船「ちきゅう」など，新しいプロジェクトは自由な研究と競争の場を作りつつある．日本の地質学が，キャベンディシュ研究所やシリコンバレーの熱気を作ることは決して不可能ではない．

先日，TV番組で携帯電話のプロセッサの開発競争を特集していた．ヨーロッパに進出するために，カスタマーの要求に対して迅速にかつ確実に対応する体制の構築，さらに要求の先を見越した対応など，現場の努力は凄まじいばかりであり感銘を受けた．日本の半導体企業に，成長に安住した時代から失われた15年を乗り越え，今，新しい熱気が戻ってきた．日本の科学技術が新しい時代に突入しつつあると理解できる．今の大学改革や研究評価などの喧噪もまたすぐに陳腐となるに違いない．しかし，科学を押し進める原動力が，「自由」と「人」であることは永遠に変わらない．それを深く自覚した分野こそ，競争に生き残るに違いない．そして，それは，未来の人類社会への貢献という高い理想を掲げる地質学の使命でもある．

公示

日本地質学会2005年度
会長・副会長および代議員選挙について

本公示による選挙は，昨年９月の第110年総会における会則ならびに運営細則・選挙細則の改正後初めての選挙で，日本地質学会の法人化に向けた移行措置として行われます．今回の選挙はこれまでの選挙とは大きく違いますので，要点を以下に記します．なお，選挙につきましては別途掲載の選挙細則および選挙内規（12月13日の評議員会で細則を一部改正し，内規を決定）をあわせてご覧下さい．先月号のニュース誌にも詳しく掲載されております（なお，同記事では2004年度と表示してありますが，正しくは2005年度です.）.

１．現在の会長，副会長，評議員および理事全員の任期を2004年９月の総会までとし，今回は全役員（監事を除く）の一斉選挙を実施します．
２．選挙するのは，会長１名，副会長２名，代議員200名（全国区100名・地方区100名）です．選挙権および被選挙権は，日本地質学会正会員にあります．
３．役員の正規の任期は２年，代議員は毎年半数（100名）交代ですが，今回に限り会長・副会長の任期は１年半，代議員は100名ずつ１年半と２年半の任期とします．
４．代議員は，最高議決機関である総会に出席し，議決権を行使できます．また，理事に立候補することができます．
５．理事は，代議員当選者の互選（立候補選挙）により選出されます．今回の選挙では１年半，２年半の各任期の代議員（地方区・全国区の別なし）から７名ずつが選出されます.ただし，理事は代議員を兼務できません．なお，会長・副会長の３名は自動的に理事となります．
６．評議員は，全国区の代議員に当選された方の中から選出されます．全国区の代議員当選者のうち１年半と２年半の各任期から代議員選挙の得票順および所属別定員充足数ならびに支部所属者を考慮して20名（理事当選者を除く）ずつ選出します．評議員は代議員を兼務します．
７．2005年度からは総会開催時期が９月から３月に変更されます．したがって，次回の選挙は，今回選挙する１年半任期（2006年３月まで）の役員の改選で，2005年９月に公示をし，2006年１月までのスケジュールで実施します．

具体的な選挙については下記のとおり実施します．立候補ならびに推薦される方はお間違いのないよう，期日までに立候補届けをご提出下さい．

2004年１月10日
日本地質学会選挙管理員会　委員長　手塚裕樹
委員　小布施明子　坂本正徳
塚本　　斉　宮城晴耕

【2005年度会長・副会長および代議員選挙実施要領】

１．選挙者および被選挙者，立候補の届出について
選挙者および被選挙者は日本地質学会正会員に限ります．立候補届けは所定の書式（別途掲載）により期日までに届くよう，日本地質学会選挙管理委員会（〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-15井桁ビル）に郵送，または持参してください．

２．選出数
会　長　１名　任期　1.5年（2004年９月～2006年３月）
副会長　２名　任期　1.5年（2004年９月～2006年３月）
代議員　100名（全国区50名，地方区50名）任期　1.5年（2004年９月～2006年３月）
代議員　100名（全国区50名，地方区50名）任期　2.5年（2004年９月～2007年３月）
１）当選者の決定は，会長・副会長は得票順，代議員は地方区が得票順，全国区は得票順とともに所属別枠による最低充足数が考慮されます．
２）全国区，地方区いずれの代議員当選者も理事に立候補できます．
３）全国区で当選した代議員で理事にならない代議員は，評議員に選出される可能性があります．

３．立候補について
会長および副会長　正会員２名以上の推薦による立候補．
代議員　自薦および他薦による立候補．

４．地方区の区分けは現在ある支部の区分に準じます．地方区で立候補する方は，居住する県別により該当する地方区で立候補してください．ただし，選挙者は所属支部に関わりなく，全ての地方区に投票できます．

５．地方区選出数は2003年12月の支部会員数により50名を比例配分しています．1.5年および2.5年任期候補者それぞれの選出数は以下のとおりです．
北海道地方区　２名（北海道）
東北地方区　４名（青森，秋田，岩手，山形，宮城，福島）
関東地方区　19名（茨城，栃木，群馬，埼玉，千葉，東京，神奈川）
中部地方区　９名（新潟，長野，山梨，静岡，富山，石川，福井，岐阜，愛知）
近畿地方区　６名（滋賀，奈良，京都，三重，大阪，和歌山，兵庫）
四国地方区　２名（徳島，香川，高知，愛媛）
西日本地方区　８名（岡山，広島，鳥取，島根，山口，福岡，佐賀，熊本，長崎，大分，宮崎，鹿児島，沖縄）

６．選挙日程

立候補受付期間	２月１日～２月29日（郵送，持参いずれも必着厳守）
選挙広報・投票用紙の発送	３月15日前後に郵送
投票期間	３月20日～４月20日
開票日時	４月24日，９時より学会事務所にて．
選挙結果報告	４月30日以降，ホームページ，ニュース誌上
理事および評議員の選出	５月初旬開始～６月10日までに決定，報告

７．立候補の状況および選挙結果については，ホームページで随時お知らせいたします．また，開票に立ち会いたい方は，４月20日までに選挙管理委員会にお申出下さい．

日本地質学会選挙細則

（目的）

第１条　日本地質学会会則第48条にもとづいて本細則を定める．

（規則の変更）

第２条　この規則の変更は，評議員会に諮り，理事会の議決によって行う．その結果を総会に報告し，承認を求める．

（選挙管理委員会）

第３条　役員（会長，副会長，理事および監事），代議員および評議員の選出作業は，選挙管理委員会が行う．

２　選挙管理委員会規定は別途定める．

（役員，代議員および評議員選挙）

第４条　理事（除く会長および副会長）および代議員は毎年，定数の半数を改選する．

２　会長・副会長，監事（１名，もう１名は会長が専門家を委嘱する）の選挙は正会員による無記名投票とし，選挙管理委員会は結果を理事会に報告しなければならない．

３　会長・副会長及び監事候補者は正会員とし，正会員２名以上の連署による推薦を受け，別途定める参考事項（必要事項と立候補にあたっての意見等）を記した立候補届けを所定の期日までに選挙管理委員会に届けなければならない．

４　代議員選挙は正会員による無記名投票とし，毎年定数の半数（全国区50名および地方区（区分は支部に準ずる）50名）を選出する．選挙管理委員会は結果を総会に報告しなければならない．なお，全国区の選出にあたっては所属別定員充足数を考慮する．

５　代議員候補者は正会員とし，自薦および他薦（本人の承諾書必要）とする．立候補者は別途定める参考事項を記した立候補届けを，所定の期日までに選挙管理委員会に届けなければならない．

６　理事（除く会長および副会長）の選挙は，全代議員による無記名投票とし，毎年定数の半数を選出する．被選挙者はその年度に選出された代議員とし，候補者は意見等の参考事項を記した文書を，所定の期日までに選挙管理委員会に届けなければならない．理事に選出された者は代議員から除くものとする．

７　評議員は毎年，定数の半数を選出する．評議員の選出は全国区代議員の選挙結果にもとづいて20名を決定する．決定にあたっては所属別定員充足数を考慮する．

８　評議員選挙の当選者の決定の際には，それぞれの支部所属者が最低１名含まれるように，
選出順位の調整を行うこととする．

９立候補者数が定数に満たない場合には，無投票当選とする．ただし，代議員選挙において全国区で立候補者数が定数を越えない場合には評議員選出のための投票をおこなうものとする．

10　投票方法，当選者の決定等については別途定める．

11　役員，代議員および評議員が任期中に何らかの理由で欠員となった際の補充方法は，以下のように取り扱う．

会　長　副会長の年長者が代行する．
副会長　理事の年長者が代行する．
監　事　会長が委嘱する．
理　事　理事選挙の補欠者をもって充てる．
代議員　会長が評議員会に委嘱する．
評議員　補充は行わない．

12　全国区代議員の選出および評議員決定の際の最低所属別定員充足数

所属	備　　考	最低充足数	
		全国区代議員	評議員
大学		6	3
小中高	教育センター等を含む	6	3
官公庁等	公団，行政法人， 公立私立博物館等を含む	6	3
会社		6	3
大学院	大学院生	2	1

（選挙日程）

第５条　会長・副会長及び監事,代議員の選挙は次の日程で行わなければならない．ただし，締切り日が休日と重なる場合は，翌日あるいは翌々日とする．

（1）選挙公示：毎年９月10日
（2）立候補受付：毎年10月１日～10月31日
（3）投票期間：毎年11月15日～12月15日
（4）開票ならびに選挙結果報告：毎年12月16日～12月22日

２　理事の選挙および評議員の選出は，代議員選挙終了後，毎年１月30日までに完了することとする．

（細則施行）

第６条　この選挙細則は，2003年9月19日から施行する．

（付則）2003年12月13日改正

日本地質学会選挙内規

（選挙の実施）

１　選挙管理委員会において実施する選挙は，原則として郵便による通信投票とする．なお，この方法によらない場合には，あらかじめそのことを広報し，有権者に周知する．

２　立候補者は所定の立候補届けを，定められた期間内に選挙管理委員会に届ける．

３　選挙管理委員会は選挙を実施するにあたり，投票の参考となるよう，「候補者名簿」を作成し，投票用紙とともに有権者に配布する．また，開票日もあらかじめ知らせる．

４　「立候補者届」および「候補者名簿」には，立候補する役職に応じて定めた下記の事項を記載する．アンダーラインの項目は必須記載事項とし（所属機関がない場合は「なし」），それ以外は自由記載項目とする．

１）会長・副会長　　立候補者氏名，所属機関，推薦者氏名（正会員２名以上），候補者推薦承諾書，所属専門部会，立候補者の抱負または推薦文（100文字以内）

２）監事　　立候補者氏名，所属機関，推薦者氏名（正会員２名以上），候補者推薦承諾書，所属専門部会，立候補者の抱負または推薦文（100文字以内）

３）代議員　　立候補者氏名，所属機関，所属機関の所在都道府県名，（「所属機関なし」の方は自宅住所の都道府県名），立候補の区分（全国区・地方区）・所属別区分（選挙細則第４条12項に定めたもの），所属専門部会，立候補者の抱負または推薦文（推薦者名）（100文字以内）

４）理事　氏名，所属機関，立候補者の抱負または推薦文（推薦者名）（100文字以内）

５　正会員は，あらかじめ選挙管理委員会に申し出て開票に立ち会うことができる．

（当選者の決定）

６　各選挙とも選挙細則に基づいて得票順位を確認し，当選者を決定する．

７　当選最下位者が複数（同点）の場合は，抽選により当選者を決定する．抽選は選挙管理委員長の責任により，選挙管理委員が候補者の代理となって，候補者名簿の順にくじびきをおこなう．

８　理事選挙の当選者決定に際しては，当選最下位者に続く補欠５名を得票順に決定する．

９　選挙管理委員会は，開票結果を速やかに理事会等に報告するとともに候補者に通知する．また，学会ホームページやNews誌に速やかに掲載し，会員にも報告する．

（その他）

10　代議員の定数と補充について
代議員全国区の定数50名から理事７名を選出した場合の欠員は，補充の対象とはしない．
また，この理由以外で欠員が生じた場合でも，会則に定めた最低定数170名（１期85名）を割らない場合は補充しない．

11　代議員地方区の定数と補充について

１）各地方区の定数は，選挙公示１ヶ月前の各支部の正会員数に応じて比例配分する．

２）地方区が定数不足でも，全国区と合わせて会則に定めた最低定数170名（１期85名）に達している場合は補充しない．

12　本内規の変更は，理事会が決定する．

（内規施行）

2003年12月13日

◎　どちらの書式も紙はＡ４判（タテ）の大きさでご提出下さい．記入枠は適宜広げてください．

会長・副会長立候補届け

＊印の項目は必ず記入してください．

＊立候補役職及び任期 （いずれかに〇印）		会長	任期1.5年
		副会長	任期1.5年
＊立候補者氏名	E-mail Address		
＊所属機関名			
＊推薦者氏名 （正会員２名以上）			
＊推薦承諾書	日本地質学会（　　）に立候補することを承諾いたします．（　氏名　）㊞		
所属専門部会			
候補者の抱負または推薦文（100字以内）．推薦文の場合は推薦人名を文章の最後につけてください．			

選挙管理委員会受取日　　２月　　日

代議員立候補届け

＊印の項目は必ず記入してください．†印は他薦の場合のみ記入してください．

＊立候補任期 （いずれかに〇印）		代議員	任期1.5年
		代議員	任期2.5年
＊立候補の区分 （地方区の場合はいずれかを〇で囲む）		全国区	
		地方区	北海道　東北　関東　中部　近畿　四国　西日本
＊立候補者氏名	E-mail Address		
†他薦の場合：推薦者氏名			
†他薦の場合：推薦承諾書	日本地質学会（　　）に立候補することを承諾いたします．（　氏名　）㊞		
＊所属機関名（ない場合はなしとしてください）			
＊所属機関所在地または住所の県別名			
＊所属別区分 （いずれかを〇で囲む）	大学　小中高　官公庁　会社　大学院　とくに区分なし		
所属専門部会			
立候補者の抱負または推薦文（100字以内）．推薦文の場合は推薦人名を文章の最後につけてください．			

選挙管理委員会受取日　　２月　　日

日本地質学会第111年学術大会：2004年９月18日～20日関東支部千葉地域にて開催

日本地質学会は本年９月18日（土）～20日（月），関東支部の全面的支援のもと千葉大学西千葉キャンパスを中心とした千葉地域において111年学術大会（2004年千葉大会）を開催します．日本地質学会は現在の任意団体から法的人格をもつ社団法人へ移行する準備を進めており，2004年千葉大会は社団法人日本地質学会へ向けての歴史的な一歩を踏み出すものになるでしょう．そこで開催校となる千葉大学を中心に千葉地域の諸機関が協力しあって，これまでの年会の経験を十分学びつつ斬新な大会にしようと意気込んでおります．講演申し込みもオンライン登録準備がオンライン化委員会の尽力で進められています．そして千葉大会の大きな柱は次の４つです．

大きな交流の場

多数の会員による自由な講演を基礎に，諸分野との交流，大学・企業・研究機関・小中高の学校・行政・市民の大きな連携を目指します．このような交流と連携は地球科学関連学会内で5000名という最大規模の会員を誇る地質学会においてこそできることです．主会場を千葉大学体育館に置き，そこでは連日，ポスター展示，各団体ブース開設，各研究組織のアクティビティを示すパネル展示，各種エキジビジョン，ミーティングなどが行われます．口頭発表のセッションやシンポジウムも当然，連日開催されます．また，千葉県立中央博物館では市民普及講演会，地質情報展（産業技術総合研究所と共催）も開かれます．

ホットでインターナショナルなテーマのシンポジウム

定番ならびにトピックセッションにおける個人講演・個人ポスター発表に加えて，ホットで，かつインターナショナルな課題について６本の充実したシンポジウムを企画します．１テーマにつき３時間用意されます．会員の皆さんからのすばらしいご提案を待っています．

最新の成果をわかりやすく実感できる巡検

房総半島をはじめ関東地方の地質の研究については近年著しい前進があります．この成果がフィールドで実感できる巡検を10コースあまり予定しており，既に各コースの案内者の方々が準備に入ってくださっています．乞うご期待です．

未来を担う学校教育

最近生徒の理科離れが言われています．自然の中から直接学んでいくことを出発点とする地学関係でも事態は深刻です．このまま放置すれば，将来の地球科学を担う若い世代が激減しかねません．学校教育の現場で活躍しておられる先生方と連携して，理科クラブ，地学クラブで頑張っている生徒諸君に発表の場を用意します．

今後千葉大会の内容は随時学会ＨＰ（http://www.geosociety.jp/）に公開されますのでご覧下さい．

日本地質学会2004年千葉大会準備委員長　大原　　隆
日本地質学会2004年千葉大会実行委員長　伊勢崎修弘

第111年学術大会（千葉大会）トピックセッション，シンポジウム公募のお知らせ

日本地質学会行事委員会

2004年９月18日（土）～９月20日（月）に千葉大学を中心とする関東支部千葉地域の会員等にお世話していただいて，第111年学術大会を千葉市で開催いたします．つきましては，発表セッションの持ち方についてお知らせするとともに，トピックセッション，シンポジウムの公募のご案内をいたします．公募の締め切りは３月15日（月）です．

１．セッション関係

＜セッションの概要＞千葉大会では，（2.5時間×10会場）×３日の口頭講演と150点×３日のポスター発表が可能となるよう会場を確保しております．口頭講演の１セッションは10講演として最大30の口頭講演セッションが可能です．但し，今回の千葉大会では，ポスター発表を重視する方向でポスター講演の数，ポスター会場や環境の準備を進めております．

＜セッションの区分＞これまでと同様に，広い分野をカバーすることに重きをおいた「定番セッション」と，特定のテーマや研究領域に焦点を当てた「トピックセッション」とを設けます．

(1) 定番セッション：層序，堆積，石油，古生物，岩石，火山，構造，地域，現行過程，情報，応用，環境，海洋などの分野またはそれを細分したものを想定しており，20ほどのセッションが予想されます．

(2) トピックセッション：開催可能な10セッションほどを募集します．他の科学や学会との境界領域を強く意識するなど，学会内外から多くの参加が期待されるようなトピックセッションへの魅力ある企画の提案をお待ちしています．

＊招待講演はどのセッションでも可能ですが，従来と同様に招待者は非会員に限り，それぞれのセッションで半日（2.5時間）あたり１件までと致します．これまで規定を越える数の非会員に招待の意志を伝えたために混乱が生じましたことがありました．今回はこのようなことのないようご留意ください．

２．シンポジウム関係

千葉大会では，地質学と日本地質学会の新たな飛躍をめざすために，個別分野の枠を越えた討論の場として６つのシンポジウムを募集します．各シンポジウムは3時間とし，その時間内であれば運営方法はコンビーナに委せられます．非会員の招待講演も可能です．また，上記定番・トピックセッションとの重複参加も可能です．斬新なシンポジウム企画の提案をお待ちしています．

３．応募方法

トピックセッション（10件程度），シンポジウム（６件）の企画に応募する方は，以下のような項目を記述して，**３月15日（月）までに**日本地質学会行事委員会宛（main@geosociety.jp）にＥメールでお送り下さい（書式自由）．

１）トピックセッション，シンポジウムの区別
２）提案者（会員に限る）メールアドレス，電話番号，FAX番号
３）タイトル
４）コンビーナの名前
５）趣旨・概要・参加予想数など
６）シンポジウムの場合，発表者を公募するかどうか，募集件数も明示

４．決定方法

トピックセッション，シンポジウムに多数の応募があった場合や定番セッションとの重複がある場合には，行事委員会で重要度や緊急度を考慮して調整の上，決定させていただきます．その後，ニュース誌（５月号予定）で決定したセッションテーマ，シンポジウムテーマを公示し，講演募集を行います．講演申し込みの締め切りは６月末頃を予定しています．

島根県，佐田町・横見埋没林

福岡　孝[*1]・沢田順弘[*2]・草野高志[*3]・中村唯史[*1]

1．はじめに

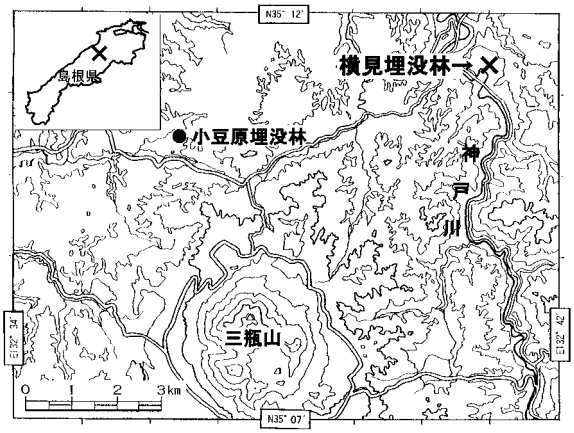
2003年５月，三瓶山の北東約８km，島根県簸川郡佐田町横見地区（第１図）の農道整備工事現場で埋没樹木が発見され，佐田町教育委員会によって「佐田町・横見埋没林」と命名された．現地は神戸川が蛇行するポケット状に入り込んだ地形であったために，三瓶火山からの噴出物が取り残され，埋没樹木が保存されることとなった．1998年に三瓶山麓で三瓶小豆原埋没林が発見された（松井，1998）が，今回，幸いにも，発見した建設業者が同じであったことで，樹木が破壊されたり，葬り去られることがなかった．これにより，三瓶火山の活動による二つの時代の埋没林が発見されたこととなる．また，今回の埋没林の発見は，それを埋積した堆積物から火山活動に伴われる興味あるダイナミックスが読みとれるという点でも貴重である．

2．三瓶山の概要

三瓶山は島根県中央部に位置する更新世後期から完新世にかけて活動した火山である．三瓶山は少なくとも3500年前（^{14}C年代）まで噴火活動があり，中国地方では山口県の阿武単成火山群とともに，2003年，気象庁によって活火山として認定された．三瓶山の火山活動は100ka頃から始まったが，その活動史は松井・井上（1971），服部ほか（1983），林・三浦（1987），福岡・松井（2002）などによって報告されている．三瓶山の火山活動は大きく見て，流紋岩質の活動からなる古期（約100kaから35ka）とデイサイト質の新期（約16ka以降）に区分される．現在の三瓶山は，新期の活動で形成された日影山，男三瓶山，女三瓶山，子三瓶山，孫三瓶山の溶岩ドーム群と太平山砕屑丘からなるが，第I期の木次降下軽石（松井・井上，1971）は遠く東北北部まで達した広域テフラ（三瓶木次テフラ：町田・新井，1992）である．ここで報告した埋没樹木を含む三瓶雲南降下軽石（林・三浦，1987）や大田軽石流（松井・井上，1971）は第II期にあたるが，この活動も大規模なものであった（第２図）．

3．佐田町・横見埋没林と地質

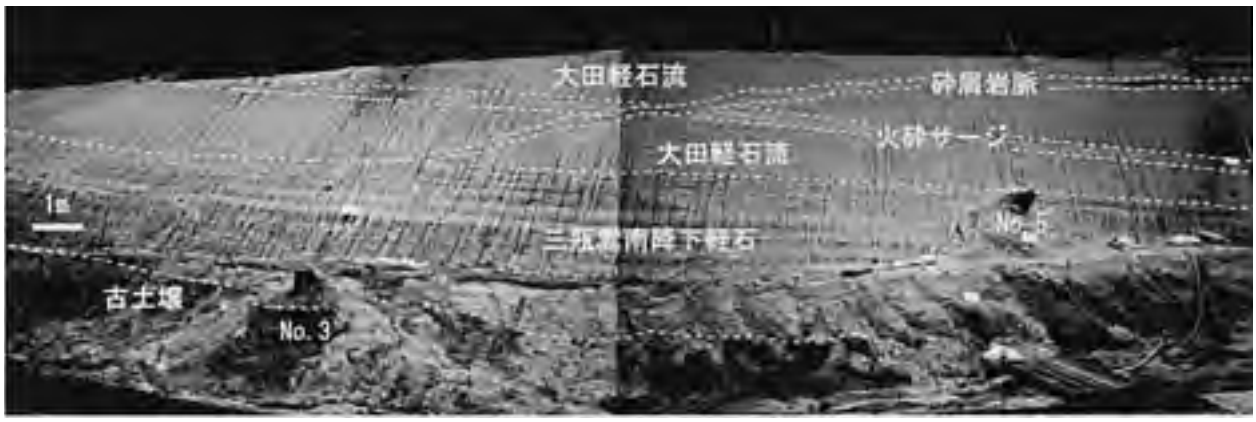
三瓶小豆原埋没林が最新期（第Ⅶ期，3.5－3.8ka頃）の活動により形成されたものであるのに対し，佐田町・横見埋没林は三瓶火山の第Ⅱ期（70ka頃：木村ほか，2000）のプリニアン噴火の噴出物（大田軽石流）によって埋没したものである．露頭では，切断部の直径が7－40cmの樹木22本の他，多数の小枝が発見されている．そのうち，根が確認された立木および立木の状態と推定されるものは12本である．著しく炭化しているものや保存状態の悪いものもある．埋没立木の最大樹高は約３mで，確認された樹種はカエデ属など広葉樹が主である．古土壌からは植物の葉や小枝が検出されている．



第１図　島根県，佐田町・横見埋没林の位置

埋没林を含む横見地区の第四紀堆積物は古第三紀の花崗岩類を基盤とする．露頭の写真を裏表紙に示した．①から⑩の説明は以下の通りである．

①更新世の河床礫層．
②塊状火山灰：鉱物組成から大山松江軽石（DMP）に対比される可能性が高い．
③第I期の粕淵火砕流（100±30ka：木村ほか，1999）と推定される．上部にはコンボリュートラミナが発達する．
④第Ⅰ期の木次降下軽石（100±20ka：木村ほか，1999）．
⑤③中の④のブロック．
⑥埋没樹木が根を張る古土壌．
⑦⑥のブロック：周辺に④，⑥の大小ブロックの破片が散在している．一部は③のコンボリュートラミナ中に取り込まれる．
⑧火山砕屑脈：脈の巾は25－150cmで，概ねNW-ES方向にほぼ垂直に大田軽石流中に貫入する．
⑨第Ⅱ期の降下火山灰（三瓶雲南降下軽石）：軽石質火山灰で下部の層厚約1.5mに最大直径３cmに達する火山豆石が密集している．
⑩第Ⅱ期の火砕流（大田軽石流）：大田軽石流は火砕サージを挟んで下部と上部のユニットに分けられる．堆積面はほぼ水平である（斜めの模様は地下水に起因するリモナイトである）．



第２図　露頭中央部（No.3，No.5は埋没木を示す）

［所属］[*1]島根県立三瓶自然館　[*2]島根大学総合理工学部　[*3]蒜山地質年代学研究所

第３図　三瓶雲南降下軽石中の埋没樹幹の炭化温度見積もり．右図の埋没樹木は第２図のNo.5.

第４図　大田軽石流－火砕サージ堆積物中の炭化木片の温度見積もり

この露頭で興味深いことは粕淵火砕流の堆積層上部にコンボリュートラミナが発達することと（裏表紙③の上部），木次降下軽石の数mに及ぶブロック⑤や古土壌のブロック⑦が含まれていることである．これらは地震あるいはカルデラ形成のような変動によって，木次降下軽石④や古土壌⑥のブロックが③の粕淵火砕流中に崩落したものと推察される．また，③の粕淵火砕流に見られるコンボリュートラミナは振動に伴い，水が抜けることに伴って形成されたものと解釈される．ここで見られる火山砕屑脈の岩相は粕淵火砕流に類似していることと，大田軽石流中に広く認められることから，三瓶山周辺で起こった変動に伴って，下位の粕淵火砕流堆積物が大田軽石流中に貫入したものと考えられる．

立木は木次降下軽石を覆う古土壌中に根を張っており，樹幹は少なくとも三瓶雲南降下軽石までは確認される．しかし，大田軽石流の上部ユニットは炭化した倒木を多数含むが，立木は認められない．また，傾いている立木に規則的な方向性は認められない．堆積物内での立木上部の切断面位置はほぼ三瓶雲南降下軽石と大田軽石流の境界部と考えられる．（表紙中央左のスケールは１m）

第３，４図はSawada et al.（2000），沢田ほか（2000a, b）によって提案・応用された炭化木片のH/C比温度計を用いた炭化温度の見積もりである（沢田ほか，未発表資料）．古土壌中の埋没樹木は黄土色をした生木である．一方，三瓶雲南降下軽石中に埋没した樹幹は黒色化しているが，見積もり温度はH/C比温度計の信頼限界に近い280-300℃である．上述したように，大田軽石流中には立木は見られないが，火砕流中で炭化した，つまり，森林火災によるものではない樹木が多数含まれている．下部の軽石流中の炭化木片の定置温度は300－320℃程度である．上部の軽石流は2.5m以上の厚さをもつが，その最下部と上部の炭化木片は360－370℃，中央部では410－420℃を示す．

以上のような埋没林と炭化木片の産状と火山砕屑物との関係，および炭化温度推定から，埋没林の形成史として，次のようなシナリオが考えられる．すなわち，古土壌中に根をはって林立していた樹木が，多量の降下火山灰によって埋没される．その後，激しい火砕流（軽石流）と火砕サージによって林立していた樹木は切断され，それらに埋積された．

４．埋没林と露頭の保存・公開・活用について

佐田町教育委員会により，徳岡隆夫島根大学名誉教授を委員長とする調査検討委員会が組織され，埋没樹木と三瓶火山噴出物との学術的な価値を明らかにし，それらの学校教育への活用，地域づくりへの検討がなされた．また，佐田町教育委員会主催で地元町民などを対象に積極的に見学会や講演会を開催するなど，普及啓発活動にも力を入れている．特に，埋没樹木や露頭の保存においては佐田町および地元自治会が意欲的に取り組んでおり，これらの活動は研究・教育の観点からも高く評価されるものである．

◎現地見学問い合わせ先：〒693-0506 島根県簸川郡佐田町大字反辺1747-6　佐田町教育委員会（TEL：0853-84-0019）

文　献

福岡　孝・松井整司（2002）AT降灰以降の三瓶火山噴出物の層序．地球科学，**56**，105-122.

服部　仁・鹿野和彦・鈴木隆介・横山勝三・松浦浩久・佐藤博之（1983）三瓶山地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１地質図幅），地質調査所，168p.

林　正久・三浦　清（1987）三瓶火山のテフラ層序とその分布．山陰地域研究（自然環境），**3**，43-66.

木村純一・中山勝博・松井整司・福岡　孝（2000）高橋正樹・小林哲夫編「中部・近畿・中国の火山」，築地書館，117-135.

木村純一・岡田昭明・中山勝博・梅田浩司・草野高志・麻原慶憲・館野満美子・壇原　徹（1999）大山および三瓶火山起原テフラのフィッショントラック年代とその火山活動史における意義．第四紀研究，**38**，145-155.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，81p.

松井整司（1998）縄文の森「三瓶小豆原埋没林」．日本地質学会ニュース，2，2-3.

松井整司・井上多津男（1971）三瓶火山の噴出物と層序．地球科学，**25**，147-163.

Sawada Y., Sampei Y., Hyodo M., Yagami T. and Fukue M.（2000）Estimation of emplacement temperatures of pyroclastic flows using H/C ratios of carbonized wood. *Jour. Volcanol. Geotherm. Res.*, **104**, 1-20.

沢田順弘・樫根知夏子・福江美智子・兵頭政幸・三瓶良和（2000a）島根県，神原第II遺跡の三瓶火山太平山火砕流堆積物の定置温度見積もり－縄文人は被害を受けたか？－，島　根大学地球資源環境学研究報告，**19**，3-15.

沢田順弘・中村唯史・樫根知夏子・三瓶良和・佐藤仁志（2000b）三瓶小豆原埋没林に刻まれた火砕流の記録．島根大学総合理工学部地球資源環境学研究報告，**19**，17-26.

報　告

本会委員会以外の研究会・委員会等よりのお知らせを掲載します.

日本学術会議第18期海洋科学研究連絡委員会（第10回）議事録

日　時：2003年７月14日（月）
13時30分―16時30分
場　所：日本学術会議　第６部会議室
出席者：斎藤常正，谷口旭，伊藤絹子，井内美郎，平啓介，角皆静男，友定彰，杉本隆成，寺崎誠，前田明夫，古谷研，西田周平，花輪公雄，石井春雄，松山優治，山口征矢，佐藤義夫
欠席者：西田篤弘，灘岡和夫，松田治，伏見克彦，蒲生俊敬

Ⅰ．第９回議事録について
事前にメールで回覧し，必要な修正を施してあった第９回海洋科学研究連絡委員会（平成15年５月14日開催）の議事録案について，再度一部修正の上これを承認した.

Ⅱ．報告事項
(1) 日本学術会議関連（谷口委員長）
日本学術会議第139回総会について谷口委員長から以下のような報告があった.
①第18期では「学術の将来に対する提言」について学術会議としての統一見解を提出する予定であったが，十分には論旨の整理ができなかったので，第19期へ引き継がれることになる見通しである.
②「日本学術会議の在り方について」政府案が決定し，日本学術会議法および関連政令等の改正作業が進行しつつあると思われるが，日本学術会議自体の改革推進委員会としても「在り方」の具体化案を鋭意検討しているところである．改革案の概要は，これまでに報告されていたものと大きく変わってはおらず，会員数は現行の210名を基本として，部の構成を現行の７部制から３部制（人文社会系，生物生命系，理工系）へ改組する．このなかで生物生命系は，前回までは生命系とされていたものである．会員および連携会員の定年を70歳と定め，任期を現行の３年から６年へ変え，３年ごとに半数改選する．初回の会員は，日本学術会議会員選考委員会を時限設置して選考する．その３年後の二回目以降はco-optationの理念に基づいて，新会員を選考する．現行の研連委員の予算定数を基本として2,370名の連携会員が任命され，研究連絡員会に替わって「課題別委員会（仮称）」が設けられる.
③第19期には，上述の改革基本方針を具体化する実施案の提出が大きな役割になると予想される．政府がそれをどれほど尊重するかは不明であるが，それを受けて法改正に臨むことは間違いないと予想され，法改正が終了すれば，第19期は任期途中で解散し，ただちに第20期，新制度の学術会議へと移行する．現時点では，2004年７月あるいは2005年３月解散の見通しが濃厚といわれている.
以上の報告を受け，委員からは，学術会議にとっては学術の将来に関する明確なビジョンを持つことが最も重要であること，また，海洋科学研連にとっては課題別委員会として存続できるように海洋科学の重要性を対外的に訴えることが重要であるという意見などが出された.

(2) 東京大学海洋研究所研究船の移管について（西田周平委員）
①西田周平委員から，東京大学海洋研究所の研究船「白鳳丸」と「淡青丸」を海洋科学技術センター（JAMSTEC）を改組して作る独立行政法人海洋研究開発機構に移管することについて，現状の報告があった．今年度になって，研究船の運航および乗組員の処遇の２項目について協議するため，海洋研究所，東大本部，JAMSTEC，文部科学省海洋地球課，同学術機関課の５者間に「研究船移管協議会」が設けられ，すでに４月17日，４月24日および５月19日に３回の会合があった．今後も同協議会の開催を重ねて，共同利用の趣旨に基づく研究船の運行を維持する仕組みを構築していくことになる旨の説明があった.
②この報告に関連して，平委員より，科学技術・学術審議会海洋開発分科会では新たに「海洋研究船委員会」を設けて本件に関する検討を開始したこと，同委員会には花輪委員と松山委員が専門委員として招かれていることが紹介された.
以上の２報告を受けて，研連委員から，「白鳳丸」と「淡青丸」を移管することにより，同一機関に性格の異なる2種類の船が多数配置されることになるので，初期の目的が誤解を受けて解消されるようなことが起こらないように対策を立てること，これまでの２研究船の性格，すなわち研究者が自発的に各個研究を提案して利用するという性格を将来に亘って維持できることを明記した文書を残すこと，前に本研連と海洋物理学研連，日本海洋学会，水産海洋学会との連名による申し入れ事項のうち文科省研究開発局長が受け入れを表明した項目が「海洋研究船委員会」の最終報告書に記載されるよう努めること，また，今後の検討の過程で求められれば本研連からの意見を述べる準備をしておくことなどが重要であるとの指摘があった.
(3) IOC総会について（寺崎委員）
６月23日～７月２日にパリのユネスコ本部で開催された第22回政府間海洋学委員会（IOC）総会 の概要について寺崎誠委員から報告があった．特にIOCとSCORでの間でGEOHAB, IGBPなどのプログラムを共同で推進するということの覚書についても，議題にあがり，今後のより緊密な連携が要請された．また総会でWESTPAC議長を昨年まで６年務められ，NEAR-GOOS計画の立案，実施に尽力のあった平啓介委員に感謝状が贈呈された旨の紹介があった.

(4) IUGG総会について（花輪委員）
６月30日から７月３日まで札幌で開催されたIUGG総会について，花輪委員から報告があり，4,600名の参加があったこと，次回はイタリアで開催予定であることが紹介された．また，IAPSO総裁に日本から推薦された今脇資郎氏が就任されることになった旨の紹介があった.

Ⅲ．協議事項
(1) 第19期研連への申し送りについて（谷口委員長）
次期研連への申し送りに関して，谷口委員長が提示した原案を基に種々意見交換がなされた．それらの意見をふまえた上で，後日，委員長が改正案を作成して全委員にメールで配信し，それについて意見を交換して決定することを了承した．その手続きを経た結果，最終的に以下の４項目を第19期研連に申し送ることを承認した.
①．海洋の物理学，化学，地質学，生物学，環境学にわたる研究と教育の振興について，引き続き審議する.
②．SCOR（Scientific Committee on Oceanic Research：海洋研究科学委員会）の国内対応体としての責務を果たす.
③．我国における海洋科学の研究と教育の推進体制確立について審議し，その成果を研連報告として取りまとめるよう務力する.
④．新生日本学術会議の活動に貢献できる研連をめざして，海洋科学研究連絡委員会の将来計画を検討する.

（議事録作成・伊藤絹子）

日本学術会議第19期第１回地質科学総合研究連絡委員会環境地質学専門委員会議事録

日　時：2003年12月５日（金）
10：30～13：30
場　所：日本学術会議　第４部会議室
出席者：町田，千木良，石井，小泉，佐々木，清水，高濱，田崎，福澤，牧野
欠席者：徳永

配布資料：
１　日本学術会議報告(町田)
２　政府の総合科学技術会議「意見具申」を受けた日本学術会議改革の検討結果について（平成15年９月）
３　地質科学総合研究連絡委員会19期委員会への引継ぎ事項（岩松）
４　地質技術者資格と教育の諸外国における実情と我が国におけるあり方シンポジウムの

ご案内（千木良）
5　第17回国際堆積学会議の概要（牧野）
6　第４部世話担当研究連絡委員会再編（町田）
7　世話担当別研究連絡委員会一覧(第18期)(町田)
8　日本学術会議古生物学研究連絡委員会報告「古生物学の現状と将来：基礎理学の重要性に鑑みて」
9　環境学における地球化学のあり方について（清水）

報告・議事概要：
1．自己紹介
2．学術会議と地質科学総合研連について，町田会員から説明
- 日本学術会議とは：目的，組織，機能；国内外の学術研究教育の振興と社会への提言，第４部（理学系）の研連委員は540人前後，対応国際会議への分担金負担
- 学術会議自体の組織改編が予定されており，19期は平成17年３月までの１年半と予想される．その後，おそらく研究連絡委員会はなくなる．
- 第18期地質科学総合研連の委員長は米倉会員（死去後岩松会員）
- 地質科学総合研連のもう１つの専門委員会である第四紀学専門委員会は本年12月１日に第１回会議を開催した．

3．環境地質学専門委員会委員長，幹事の選出
「研究連絡委員会の委員長は学術会議会員がなり，専門委員会の委員長は各委員会で選出する．各専門委員会委員長は研究連絡委員会の幹事を兼ねる.」ことを合意の後，次のように，投票によって委員長を決定し，その後に幹事を決定した．
・委員長　千木良
・幹　事　福澤，石井
4．日本学術会議総会，第４部会の報告（町田）
- 第19期の活動方針（「学術の動向」2003.12号に掲載）について審議．
- 学術会議の改革の一環として２～３部体制になると，基礎研究の学協会は規模が小さいため，大きなところにのみ込まれてしまうといった危惧がある.そのため，第４部会（理学）から，基礎科学研究の重要性を「活動方針」に盛り込むことを要望した．
- 次期から，これまでの研究連絡委員会を廃止して，分野別，課題別の「連携会員」（任期３年）が選ばれることになろう．連携会員と学協会との関係は未だ不明．
- 改革後の最初の学術会議会員は時限設置される「選考委員会」で決まり，その後は欠員を会員が選ぶ方式をとる．70歳定年．
- 今までも，研究連絡委員会の統廃合があった．新しい分野の研連の定員を満たすためでもある．
- 研究連絡委員会の自己評価を求められる．
- 環境理学研究連絡委員会は地球温暖化に関係する委員会で野上道男会員が世話役．

5．第18期からの引き継ぎ事項
- 岩松前会員からの引継ぎ文書をもとに議論した．
- 応用地質学関係の研究連絡委員会としての役割がこの委員会にある．
- 第四紀専門委員会が長期の環境変化，環境地質学専門委員会が短期の環境変化を主たる対象にするが，両方の専門委員会の活動分野は歴史科学的視点に根ざしているので，オーバーラップしてもよい．

6．第19期の活動計画
1）JABEEシンポジウムの主催
- 平成15年12月25日に関連の研連，学協会と主催する．テーマは「諸外国における地質技術者資格と教育の実情と我が国におけるあり方」．千木良委員長からJABEEの内容について概略説明．
- 千木良（応用地質学会技術者教育委員会委員長），三宅（地質学会JABEE　WG委員長）が申請した「諸外国における技術者教育と資格認定調査に関する科研費補助金」が採択され，その経費を用いてシンポジウムを開催する．
- 米，カナダ，英では，Engineering技術者資格とともにGeoscientistsの技術者資格がある．我が国でこれらの資格と関係付けて技術士の応用理学部門（地質）やJABEEによる教育認定を考えてゆく必要がある．
- イギリスでは，かなりカリキュラムを変更して，環境地質および環境科学関係の授業を行っている（千木良委員長）

2）第17回国際堆積学会議共催
- 牧野委員から，下記会議について，共催援助の要請があり，承認した．
- IAS（国際堆積学協会）が４年ごとに開催する国際会議の第17回目の会議を2006年８月末に福岡で行う．参加者は700名（国内400，海外300）の予定．

3）その他
その他の今後の活動として，次の２点について議論した．
理科離れ対策・初等中等教育における地学教育
- 野外教育へのニーズは多い．
- 社会人ボランティアによる野外授業，教師のリカレント事業，サイエンスキャンプ（高校生と教師対象）なども考えられる．
- 地質学会・地すべり学会なども，一般向けの地学教育を実施している．

環境地質学の学問体系・教育体系
- この体系については，まだ明確になっているとは言えない．実情を調査することも活動の一環として必要．
- 資料９は，それに関係する地球化学会のアンケートに基づく提言．
- 次回委員会時に参考となる資料を持ち寄る．

今後，当委員会の活動内容を検討し，速やかに行動に移す必要があることを確認するとともに，「とりまとめた内容を誰に提言していくか」も活動内容とともに考えていくこととなった．
7．今後の予定
次回は12月25日のシンポジウム当日の昼食時間（12：40～）に次回専門委員会を開催する．第３回は２月下旬から３月頃の予定．

2003年度第３回自然史学会連合運営委員会議事録

日　程：2003年７月19日（土）
10：00－12：00
於　国立科学博物館・分館
出席者：森脇，伊藤，西田，森田，溝口，野村，佐々木，篠原

1．報告事項
(1) 日本学術会議：第18期の終了（７月21日）および19期と今後の動向について（森脇）；(2) 自然史学会連合第９回シンポジウム：演題が確定し，ポスターを準備中（篠原）；(3) 日本霊長類学会との共催シンポジウム：６月29日に仙台市で実施，80名（約半数が学生で，約３分の１が非学会員）が参加（篠原）；(4) GBIF国際フォーラムの連合シンポジウム（10月８日）：演者が確定（伊藤・森田）；(5) 第1回博物館部会会合（10月８日）：議題と会議の規模を検討中（森田）；(6) 連合加盟希望の日本陸水学会と日本進化学会について（篠原）
2．審議事項
(1) 次期代表候補について：引き続き加盟学協会に候補者の推薦を依頼するが，運営委員会としても探す必要性を検討した；(2) 連合活動の広報について：各種シンポジウムの宣伝は雑誌等の記事欄を今まで以上に利用することを検討した．宣伝母体である連合ホームページの充実が必要であることを確認し，エッセイの他にフォトギャラリーで認知度を高めることにした；(3) 博物館部会委員・シンポジウム演者の旅費について：負担方法や金額に関して検討した３その他次回の運営委員会は10月中下旬を予定

2003年度第４回自然史学会連合運営委員会議事録

日　程：2003年10月25日（土）
10：00－12：00
於　国立科学博物館・分館
出席者：森脇，伊藤，西田，森田，溝口，佐々木，野村，遠藤，篠原

１．報告事項
(1) 総会の日時の確認（11月29日10：00－11：30）と主催シンポジウムの準備状況（篠原）；(2)「自然史系・生物系博物館における教育・研究の高度化について」（日本学術会議動物研連植物研連対外報告書）について（遠藤）；(3) 第１回博物館部会（10月８日，つくば市）について（森田）；(4) GBIF国際フォーラムにて開催した連合シンポジウム（10月８日，つくば市）について（伊藤・森田）；(5) 自然史教育展開プログラム（11月19日，千葉中央博）について（森田）
２．審議事項
(1) 総会について：次期代表候補を検討した．新運営委員選出も同時に実施するので，運営規則に基づき手順について確認した．(2) 今年度の予算執行状況と内訳（事務経費，ＨＰ維持費，シンポジウム・部会経費）が会計から報告され，次年度予算に組み込むべき内容について検討した．(3) 来年度の主催シンポジウムを，国立科学博物館の新館オープンと関連させて上野本館で実施することを検討した．(4) HPの内容充実について話合い，各学協会に協力を求めることとした．英語版のHPの作成は見送ることにした．

公募

教官公募等の求人ニュース原稿につきましては，採用結果をお知らせいただけますようお願い致します．

筑波大学地球科学系教官公募

募集職種：講師１名（地球科学系所属，自然学類配置）
専門分野：地球物質科学（鉱物学的手法，特に結晶学及び物性に関する実験が指導できる人）
採用予定：決定後，可能な限り早い時期
応募資格：博士の学位を有すること
担当予定：第一学群自然学類関連開設科目（鉱物学，同実験，同演習，地球科学実験，地球物質科学，同実験）大学院博士課程　生命環境科学研究科地球進化科学専攻（地球物質科学演習，同実験，同野外実験）
提出書類：１）履歴書（市販用紙使用，学位明記，署名捺印）
：２）研究業績目録　（審査付き論文，著書，その他諸報告に区分）
：３）主要業績　５編の別刷（コピー可）
：４）教育研究活動の概要（書式自由，Ａ４紙　１枚　1000字程度）
：５）教育・研究に対する抱負（書式自由，Ａ４紙　１枚　1000字程度）
応募締切：**2004年２月16日（月）必着**
提 出 先：〒305-8571　つくば市天王台1－1－1　筑波大学　地球科学系
地球科学系長　木股　三善　宛
（＊　封書に「地球物質科学応募書類在中」と朱書きし，簡易書留で郵送のこと）
照 会 先：筑波大学地球科学系　木股　三善
（TEL 0298 - 53 - 4209 or 4544）
以上

北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻教官公募

職種・人員・専攻分野
地球惑星物質圏科学講座　教授　１名
専攻分野：地球化学（固体地球，惑星物質，水－岩石相互作用など）

応募資格：博士号を取得していること

着任予定時期：決定後できるだけ早い時期

応募書類
イ）履歴書（内外の学会活動，受賞歴，参加しているプロジェクト研究歴，各種研究費受領歴なども記載すること）
ロ）これまでの研究経過（2,000字程度）
ハ）研究業績目録（和文のものは和文で表記すること）
Ａ．査読のある原著論文
Ｂ．査読のない論文，総説など
Ｃ．著書
Ｄ．解説，報告などその他の出版物で特に参考になるもの
ニ）主な原著論文の別刷または著書　10篇以内（複写可）
ホ）今後の教育・研究の計画・抱負（2,000字程度）
へ）応募者について照会が可能な方2名の氏名と連絡先

応募締切：**2004年３月７日（日）必着**
封筒の表に「教官公募関係」と朱書し，簡易書留にて郵送すること．
また，公募書類中の第１ページに応募先講座名を明記すること．

書類の送付先及び問い合わせ先：
〒060-0810　札幌市北区北10条西８丁目
北海道大学　大学院理学研究科　地球惑星科学専攻　鈴木徳行
電話：011-706-2730（ダイアル・イン）
FAX：011-746-0394
電子メール：suzu@ep.sci.hokudai.ac.jp

東京大学地震研究所教官公募

１．公募人員：教授　１名
２．所　　属：地震予知研究推進センター
３．研究分野：地殻活構造分野
構造地質学・反射法地震学を用いて，地殻活構造，アクティブテクトニクスの研究を進める方．そのために，大規模構造探査等の共同研究を主導的に組織して，地震発生メカニズムの解明及び地震防災に資する基礎研究を実施する能力がある方．特にこれらの分野において実績があり，当該研究分野を積極的に推進していく意欲のある方が望まれる．
４．採用予定時期：決定次第できるだけ早い時期
５．応募資格：博士の学位を有する者
６．任期について：本研究所の教員の任期に関する内規により，満55歳を越えることとなる者の所属する分野の職に任期を定め，任期は５年以内とする．再任については本研究所教授会の承認を得た場合は１回限り可．ただし，東京大学教官の定年に関する規則に定めるところの定年による退職の日を越えることはできない．
７．提出書類
１）履歴書（市販用紙可）
２）業績リスト（査読の有無を区別すること．投稿中の論文を含む）
３）主要論文の別刷り３編程度（コピー可）
４）研究業績の概要（2,000字程度）
５）今後の研究計画（2,000字程度）
６）応募者について参考意見をうかがえる方（２名）の氏名，連絡先とe-mail
８．公募締切：**2004年２月20日（金）必着**
９．問い合わせ先：東京大学地震研究所地震予知研究推進センター　　加藤照之
Tel：(03) 5841-5730
Fax：(03) 5689-7234
E-mail : teru@eri.u-tokyo.ac.jp
10．応募書類提出先
〒113-0032　東京都文京区弥生１－１－１
東京大学地震研究所　人事掛宛
封書を用い，表に「地殻活構造分野教授応募書類」と朱書きし，書留郵便で送付して下さい．

紹　介

新編火山灰アトラス
［日本列島とその周辺］

町田　洋・新井房夫　著

東京大学出版会，2003年９月25日発行，
Ｂ５版，vii＋336pp. ISBN：4130607456
本体価格7,400円

本書は，1992年８月に出版された同名の書の増補判と言うべき本であり，改訂判ではない．つまり，それだけ前著は良くできている．しかし，以後の約10年間に新たに蓄積されてきたデータを追加すべき必要が生まれてきた．一般に専門書の増補や改訂判の出版は敬遠されがちである．つまり採算が取れない見込みがあるからである．その問題点を克服したのは，前著の売れ行き，すなわち利用度が高かったためと言えよう．

両著とも章立て等の構成は同じであるので，その線に沿って「新編」の特徴を示したい．

基礎編は次の５章よりなる．テフラを生む噴火，テフラ層の単位と名称，テフラの同定法，テフラの噴出年代測定法，日本地域のテフロクロノロジー．このうちで鉱物レベルでのテフラの同定では，ICP発光分析やINAA放射化分析などのいくつかの微量元素最新分析法が紹介されているが，日本での実例はまだ僅少である．テフラの年代測定法に関して新編では，海底堆積物中の酸素同位体編年との対比をより重視している．また^{14}C年代測定法では，Stuiverほか（1998）による歴年への較正の必要性を示しており（補正式は掲載せず），これまでのテフラについて出来る限り補正しようと試みている．

本書の主体を構成する「日本のテフラ各論」は，広域テフラとは，後期第四紀の広域テフラ，日本各地の後期第四紀テフラ，中・前期更新世の広域テフラ，日本列島周辺の海底テフラの５章から成っている．第２章で扱った広域テフラに，新しく十和田八戸テフラ（To-H）と十和田大不動テフラ（To-Of）の記載を加えた．また支笏第１降下軽石の分布を東北日本東方沖からの４本の海底コアにまで広げている．第４章の中・前期更新世テフラとしては，阿蘇１テフラと樋脇テフラ，さらに飛騨山脈起源の５枚のテフラを加えている．第5章の海底コアからの産出に関しては，残念ながら日本海におけるODP，北西太平洋からは「みらい」により採取された例を追加しているに止まっている．

付記１に取り上げた「海外の大規模テフラ」ではIcelandとEast Africaの例を新設，New Zealandについても大幅な増加が認められる．付記２の「日本における第四紀広域テフラの火山ガラスの化学組成」でも，上記の十和田起源の２テフラ（To-H, To-Of）について新しく記述し，研究の進んだ中・前期更新世テフラに関する記述は３倍近く増えている．　さらにICP分析結果が新設されている．

巻末にはテフラ略号索引が加わったのは便利である．こうした結果，総数が60ページ増加している．なお，前著にあった付記「日本の主要テフラの放射年代測定値」一覧表（10ページ）は削除した．同表における放射性炭素年代はほとんどが炭質物を材料としており，加速器質量分析計などによる多くの結果は未だ含まれていない．また基準的方法が確立されていなかったフィッショントラック法や熱ルミネッセンス法などによる結果も多く含まれていた．すこし不便かも知れないが，日本のテフラ各論の第３，４章にリストアップされている各テフラの年代に関する記述を参照する必要がある．

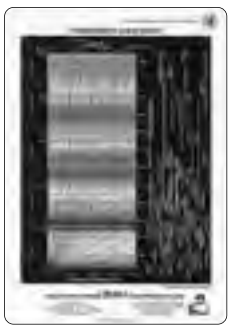
本書の序文に述べているように，新編を世に問う理由の一つとして，陸上の海成層，特に現海底の堆積物に含まれるテフラの研究の進展をあげている．しかし，こうした海底コアの研究に従事している，本書の紹介者としては，意を尽くしているとは言えない．年代測定法に関連して海底コアに含まれる有孔虫殻の安定酸素同位体年代（MIS）を重視している．これは一種のアナログ時計であるが，それに放射年代というデジタル時計目盛りを付ける必要がある．そのためには加速器質量分析計を活用して有孔虫殻をつくる炭酸塩中の放射性炭素年代を測定する．つまり同分析計使用にかかわる便宜や費用の点を克服すれば，多数の年代値を求める事ができ，そこに挟在するテフラの年代を特定できる．そうした例の引用が十分とは言えない．

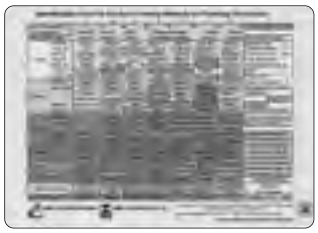
また琉球弧北部にはトカラ諸島や九州に起源を持つと予測されるテフラや，南部には台湾からフィリピン，沖縄トラフ南端の火山起源らしいテフラも海底コアに産出している．今後のテフロクロノロジーにとっての新しい課題ともなろう．

ともあれ，本書は旧著に増して，日本を含めた北西太平洋域の第四紀の研究者にとって欠かす事の出来ない本である．余裕があれば手元に，最小限，関連図書室に備えておくべきである．これは考古学者にとっても同断であって，本書を参照していれば，マスコミに踊らされた前期縄文時代問題はおきなかったはずである．当時の新聞の第１面に証拠として取り上げられた“50万年前”の火山灰の根拠は初から否定できた．それを放置した研究者や所属学会の責任も否めない．

（氏家　宏）

「干渉色図表」・「偏光顕微鏡による鉱物鑑定表」（英語版）が下敷き（プラスティック製/A4版/両面カラー）になりました．





岩石学を学習する学生さんをはじめ，偏光顕微鏡を使用する全ての研究者の方々に有効に活用していただけることと思います．ご希望の方は学会事務局までお問い合わせ下さい．
会員価格　200円　非会員価格　300円

NOW ON SALE !!

学協会・研究会報告

ネパールの自然災害問題に関する国際セミナー

吉田　勝[1]・V. Dangol[2]

([1]ゴンドワナ地質環境研究所及びトリブバン大学　[2]トリブバン大学)

表題のセミナー（International Seminar on Disaster Mitigation in Nepal）が昨年１１月18日にカトマンズで開かれた．ネパール工科大学と愛媛大学の共同主催で，参加者はネパール，日本，インドの３カ国から100人ほどであった．日本人の参加者は鷲見純良，比留間雅紀の両氏（JICA専門家）と吉田の３名であった．シンポジウムでは９講演が午前と午後の２セッション分けて行われ，最後に総合討論があった．

会場はカトマンズ市西部にある最高級ホテルのソルティークラウンプラザで，国際シンポジウム会場としての設備は申し分なく，関連のサービスも十分であった．開会式はネパール工科大学学長R. R.Upadhyay博士の司会により，主賓の王室諮問委員会（Raj Parishad Standing Committee）議長P. N. Chaudhury氏の挨拶等があり，引き続いてLandslide Hazard Mapping : A Tool for Disaster Management in Nepalと題する特別講演がV. Dangolによって行われた．

第１セッションはV. Dangolの司会で以下の４講演があり，最後に議長によるまとめがあった．

Monitoring Slope Movements, Early Warning Systems（P. K. Basudhar, S. Chandra）

Disaster Management in Nepal: Issues and Challenges（G. B. Tuladhar）.

Role of Go and NGo Organizations in Water Induced Disaster Mang and Public Awareness（S. B. Khadka）.

Planning of Sabo Engineering and its Impact in the Dahachowk Watershed Area: An Example in the Hillside of Kathmandu Valley（R.Tuladhar, S. P. Sharma, M. Hiruma）.

第２セッションはS. Chandraの司会で，下記の３講演があった．

Landslide Triggering by Torrential Rainfall ; Understanding from the Matatirtha Landslide, Southwestern Outskirts of the Kathmandu Valley（R. K. Dahal, K. R. Kafle）.

Water Induced Disaster Scenario of Nepal, Based on Disaster Information System of the Department of Water Induced Disaster Prevention（L. C. Pradhan, P. M. Shrestha, T. Fukada, Y. Sumi）.

Post Disaster Management in Nepal（B. H. Devkota, presented by R. Mishra）.

総合討論「Need of Coordinated Approach in the Landslide Disaster Mitigation in Nepal」は A. N. Nhandari, V. Dangol, G. B. TuladharとD. Bhattaraiの共同司会で行われた．セミナーでの講演や予定講演を踏まえ，とくにネパールにおける自然災害の総合的研究や対策について，今後の効果的な進展をどのようにして実現するかが主題であった．多くの積極的な意見と議論がだされ，個々の意見については議長団による評価とまとめが示された．主な結論は以下の５点であった．

１．第一に，ネパールの自然災害に関する諸方面のデータを一箇所に集めて解析するセンターを設立する必要がある．データは常に更新，補充され，必要な人達に容易に利用されねばならない．従来この点が特に問題であった．これらの仕事の常時的な監査・評価も伴われるべきである．

２．上記の方向に沿った原則の確立と，立法措置が必要である．これは現在のネパールでは欠如している．

３．立法措置には同時にそれを具現化するための能力が必要とされる．それなくしては法律等は正常に機能しない．開発途上国では立法措置等だけでは事態は解決されない．

４．上記のセンター等やそこで働く人たちに対する監査・調整機構も同時に設立されねばならない．

５．他の関係機関やネットワークとの共同作業や連携，データの共同利用が重要である．

２セッション９題の講演はいずれもアカデミック，技術的，あるいは社会的に興味深いものであった．講演はいずれも英語で行われ，わかりやすく見ごたえのある図表がよくアレンジされ，LCDプロジェクターが活用された．質疑や討論は熱心で，かついずれも建設的であった．セッションの最後には議長によって全体の講演を通じたまとめが示された．専門分野の違う第一筆者にもずいぶんとわかりやすく，ネパールにおける自然災害対策の実態と，それに対するとりくみの重要性が理解された．

写真説明：Professor D. Bhattarai, the chairman of the symposium is giving an inaugural speech. A soldier is guarding the main guest（Mr. P.N. Chaudhury）

パネルディスカッションでは最初に議長団からセミナー全体のまとめが示された．これは実にうまくまとめられた説得力に富むものであった．引き続いて全体討論があり，それを踏まえた最終提案（前記の５項目）が議長団から示された．全体を通じて講演内容，参加者の積極的な姿勢，議長の適切なまとめなど，まことに印象深く，学ぶところの多いセミナーであった．

唯一残念だったことは，同セミナーの一方の主催者である愛媛大学の参加者らが，航空機の故障のためにセミナーに参加できなかったことである．同様なことはインドからの参加者についても起こった．このため，プロシーディングスに含まれていた15の講演のうち10講演がキャンセルされた．しかしこのような困難にもかかわらず，主催者は新たに３講演を加え，講演時間や討論時間を調整し，参加者に大きな満足感を与えたようである．

本セミナーはネパールにおける自然災害の多面的かつ学際的取り組みの重要な第一歩を記したと思われる．本セミナーでは記述のように15論文を収録した118ページのプロシーディングス（A４版）が発行され，事前に参加者に配布された．本セミナーのより詳しい内容やプロシーディングスについては，下記の主催者にお問い合わせ下さい．

Prof. D. Bhattarai, The Principal, Nepal Engineering College, G.P.O. Box 10210, Kathmandu, Nepal.

E-mail : yasmino@wlink.com.np

写真１：Sao Khua層の古土壌とその上位の河川堆積物

第５回IGCP434国際シンポジウム（タイ）報告

坂井　卓（九州大大学院理学研究院）

IGCP434（代表：平野弘道早大教授）の第５回国際シンポジウム（“Stratigraphic Correlation of Marine and Non-marine Cretaceous Rocks of South and East Asia and Adjacent Areas”）が，2003年12月８日－10日にタイ国カラシン州で開催され，会議後の10日－14日にタイ北東部に分布する非海成白亜系を中心にKhorat層群の野外見学会が実施された．会議は，タイ地質学会名誉長官Adichat Surinkum博士，IGCP434タイ国代表でタイ地質局鉱物資源部門（DMR）のAssanee Meesook博士，ならびにIGCP434代表からなる組織委員会で準備され，カラシン州Rimpaoホテルで３日半に日程で行われた．参加者は，タイ（27名），日本（13名），韓国（５名），フィリピン（４名），中国（３名），ベトナム（２名），インド（２名），ロシア（２名），モンゴル（１名）から９か国59名であった．我が国からは，平野弘道・坂幸恭（早大），久田健一郎（筑波大），石田啓介・F. Hirsh（徳島大），香西　武（鳴門教育大），安藤寿男（茨城大），近藤康生（高知大），長谷川　卓（金沢大），長谷川善和（群馬県立自然史博），千葉知加子，坂井　卓・安田和代（九州大）が参加した．

＜シンポジウム＞

カラシン州知事Wist Rojanapan氏，プロジェクト・リーダー平野教授，およびタイ国，地質学会副会長Samai Chiamcchindaratana氏の開催挨拶に続いて，平野教授ならびに中国南京大学Jingeng Sha教授による基調講演が行われ，それぞれ，JGCP434の目的と成果，Trigonoidaceaの古生物学についての中国の研究最前線が紹介された．

講演は，６つのセッションに分けられ，初日にセッション１－２，２日目にセッション３－５およびトピックスが開かれた．各セッションの内容は，セッション１（非海成白亜系：講演数4件），セッション２（海成ー非海成白亜系の対比：講演数４件，セッション３（白亜紀化石：講演数５件），セッション４（白亜系の年代と層序：講演数４件），セッション５（白亜紀テクトニクス：講演数5件），およびトピックス（講演数３件）であった．

３日目には，来年度にタイで開催予定の，化石の保全と保護に関する国際シンポジウムについての趣旨説明があり，この問題について活発な議論が行われた．

本会議で行われた講演と議論の中で，特に次の３点は印象に残った．第一点目は，アジアの白亜紀堆積盆を特徴づける赤色岩について，その層序学的位置づけとともに，気候変動の記録および地球化学的上の意義付け，古地理復元に関するテクトニクスなど，多様な観点からの取り組みが示されたこと．第二点目は，白亜系堆積シーケンスの発達過程，炭素・酸素同位体変動パターンの解析と白亜紀海成・非海成層の対比に関する議論のレベルの向上．第三点目に，各国間の共同研究の浸透が挙げる．特に，第三番目に関して本会議では，IGCP434メンバー相互の国境を越えた共同研究とプロジェクトが，ベトナムー日本，韓国ータイ，タイー日本の間で展開された．このことは，かつての欧米主導型の研究から脱し，アジアの白亜紀研究が独自の視点の下で，近隣のパートナーとの協力体制により推進しようとする，これまでにない新しいステップに進んだことを明確に示していた．先行のIGP350で構築された国境を越えたフレンドシップは，確実にIGCP434へと継承・発展され，すでにパートナーシップを発揮する段階に達していることを実感した．

＜野外見学会＞

Khorat Basinはインドシナ地塊上に発達する最大の非海成堆積盆で，タイ北東部に典型的に露出する．その層序は，幾つかの不整合を挟みながらトリアス後期から恐らく古第三紀に及ぶと考えられており，白亜系はアジアの白亜紀環境変動を記録する重要な対象である．Meesook博士率いるDMRメンバーによる白亜紀陸成層の組織的な野外見学会は，1998年マレーシアで開催されたGEOSEA会議後に一度経験していた．しかし，今回案内されたルートは３地点を除けば５年前と重複しておらず，最新の研究が展開されている場所と新たに恐竜の発掘地点も盛り込まれており，南アジアの白亜系研究の最前線を知る上でまたとない機会となった．

１日目は会議後の半日巡検に当てられ，Kakasin州Sahat Sakanの恐竜センター（Stop1）に向かう．ここはタイ最大の恐竜産地の中で，保存の良い少なくとも６体の恐竜が折り重なって横たわる様は生々しい．恐竜の発掘現場は５年前と変わっていなかったが，これ自体が大きなドームで覆われていた．一般の見学者にも化石の発掘作業の実体と化石研究の意義が直接伝わるように工夫されていた．ここでは，当センター長V. Suteethurn博士からの解説を聞いた後，特別にサイトに降ろしてもらい恐竜化石やそれを含む地層を直接観察した．骨層は，赤色シルト岩に挟在する低角度斜層理をもつ岩礫粗粒砂岩であり，恐らく自然堤防決壊堆積物に当たる．

２日目はSakon Nakhon州Phu Phan国立公園のKhan Hom滝（Stop２），Sao Khua層の赤色岩（Stop３）およびSao Khua・Phu Phan層の境界（Stop３＆４）を見学した．Khan Hom滝は最下部白亜系Phra Wihan層の石英質砂岩中の見事な大型板状斜層理および随伴する中規模トラフ型斜層理は，河床のベッドフォームを示し，供給源として北方ベトナム方面のゴンドワナ系を示唆する．この日のハイライトはSao Khua層の赤色岩で，典型的な土壌化した氾濫源堆積物のセクションが観察できた．当所のPhra Wihan層赤色岩については，韓国Yong Il Lee教授らとの共同研究が行われており，古土壌化と気候変動サイクルについての説明があった．赤色岩は上位に向かって次第にカルクリートの頻度が高くなり，シャープな境界で河川成の厚層理石英質粗粒砂岩と接する（写真１）．このサイクルの境界が気候変動によるものか，あるいは相対的な地下水面変動，すなわちシーケンス境界にあたるのか，興味を掻き立てられた．投宿したRiver View Hotelはラオスとの国境をなすメコン川に面しており，翌朝の日の出が川面に映える様は美しかった（らしい）．

３日目は午前中にNakhon Phanom州下部白亜系最上部Khok Kruat層の恐竜の足跡化石（Stop６）を見学後，Nong Kahi州に移動し，古第三系に見なされているPhu Thok層の風成砂岩層（Stop７）を見た．Khok Kruat層の恐竜足跡は小型であるが，同一層理面上に複数種が認められ，リップルや乾列などの堆積構造と共に保存が良い．Phu Thok層の風成砂岩層は寺院の背後の約100mの高さの孤立した小山をなしている．麓からでも厚さ10m近い大型高角度斜層理が確認できる．断崖に木造の階段と橋を渡した空中回廊に沿って，厚さ５～15mのデューンと数mのインターデューンの繰り返す堆積層序が観察できた（写真２）．インターデューンは粗粒シルトと細粒砂が数センチメートル間隔で

互層する堆積相を示すが，多くの場合，層理が乱れている．これに関して，Yong Il Lee教授はデューン形成中止期のwetな状態での風による擾乱作用との見解を示したが，なるほど卓見と感心した．午後は，世界遺産に指定されているBan Chiangの古代陶器博物館（Stop 8）を見学した．

4日目はKhon Kaen州へ歩を移し，Sao Khua層中の非海成二枚貝化石（Stop 9），ジュラ系Phu Kradung層と白亜系Phra Wihan層との境界（Stop10），Khok Kruat層とこれを被覆する第三系（Stop11），最後に再び最上部白亜系Phu Thop層の赤色岩（Stop12）を観察した．Sao Khua層中の二枚貝化石密集層はタイでは大変珍しく，乱掘防止のために露頭の保全が講じられていた．沖積扇状地の堆積物中に挟在する湖沼堆積物にあたるが，化石の産状について近藤・香西氏から解説があり，現地性のものを含むとの結論が示された．J/K境界露頭は，下位のPhu Kradung層の古土壌相を直接被覆して，イプシロン型斜層理をもつ粗粒石英質砂岩からなる分岐河川相Phra Wihan層との間に示され，明瞭な不整合境界にあたる．

5日目の最終日は，Phu Wiang国立公園でPhra Wihan層の観察（Stop13）後，Phuwiang恐竜研究センター（Stop14）を訪ねた．当所は，タイで最初に恐竜化石が発見された場所で，現在3層準から見いだされた化石は，それぞれ元来の産状を復元して屋内展示されていた．いずれの層準も細礫礫岩で，河道と溢れだし堆積物に比較できる．ジュラ系に重なる石英質砂岩の発達や汽水性のカキ化石密集層が挟在される点は，黒瀬川構造帯の川口層の堆積シーケンスとよく似ていると感じた．Phuwiang恐竜研究センター内で昼食を取った後，博物館に展示されている化石とその復元模型などを見学した．

＜あとがき＞

国際会議の高い頻繁に示されるように，今日，タイ国は，GEOSEAを始めとして南アジアの地球科学のリーダーとして着実な歩みを示している．しかし現実には，組織の構造的改組が進む中で，少ない研究者に掛かる負荷も大きくなっている．多忙な中で，この会議を成功に導いたMeesook博士を始めとするタイ国リーダーの高い資質と組織力そして豊かな人間性に深く感謝申し上げたい．

タイと我が国との連携プロジェクトとして，IGCP411（代表：波田教授）の国際会議と巡検が今年2月に，化石の保全・保護に関する国際シンポジウムも今年度中に開催が計画されている．また，IGCP434関連ではShan-Thai Project（日本側代表：鳴門教育大香西氏・徳島大石田氏）が継続しており，地質情報の交換は益々盛んになっていくであろう．

写真2：Phu Thok 層の風成砂岩層

CALENDAR

2004.1～

地球科学分野に関する研究会，学会，国際会議，などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内致します．会員の皆様の情報をお待ちしています．
☆印は，日本地質学会行事．

1月　January

○日本古生物学会第153回例会
1月24日（土）～25日（日）
場所　熊本県天草郡　御所浦白亜紀資料館
http://ammo.kueps.kyoto-u.ac.jp./palaeont/index2.html

☆関東支部：構造地質学セミナー
1月24日（土）～25日（日）
会場　千葉大学総合校舎　E号館5階地学実験室
http://www.geosociety.jp/

2月　February

○国際シンポジウム
東および東南アジアの地質進化
2月8日～14日
場所：The Gem and Jeuely研究所，Chulalong Korn大学（タイ・バンコク）
問い合せ先：ichise@arsia.geo.tsukuba.ac.jp

☆西日本支部第148回例会・総会
2月14日（土）
会場：広島大学理学部（E棟）
http://www.geosociety.jp/

3月　March

○第38回日本水環境学会年会
3月17日（水）～19日（金）
場所：札幌市コンベンションセンター
http://www.jswe.or.jp/index.html

○日本地理学会2004年度春季大会
3月27日（土）～28日（日）
会場　東京経済大学
http://wwwsoc.nii.ac.jp/ajg/index.html

5月　May

○地球惑星科学関連学会合同大会2004年合同大会
5月9日（日）～13日（木）
会場：幕張メッセ　国際会議場
http://www.epsu.jp/jmoo2004/main.html

6月　June

○資源地質学会第54回年会
6月15日（火）～17日（木）
会場：東京大学山上会館
http://www.kt.rim.or.jp/~srg/

7月　July

○第41回理工学における同位元素・放射線研究発表会
7月7日（水）～9日（金）
会場　日本青年館（新宿区霞岳町15番地）
http://www.jrias.or.jp/

○第39回地盤工学研究発表会
7月7日（水）～9日（金）
会場：朱鷺メッセ　（新潟コンベンションセンター）
http://www.jiban.or.jp/

○19th Himalaya-Karakorum-Tibet Workshop
2004年7月10～12日
場所：北海道ニセコ・ニセコ東山プリンスホテル
http://www.ep.sci.hokudai.ac.jp/~arita/HKT/index.html

○第10回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会
日時：2004年7月14日（水）～16日（金）
場所：大阪国際交流センター
http://www.groundwater.jp/jagh/home.htm

8月　August

○The 32nd International Geological Congress 2004（IGC）
8月20日（金）～28日（土）
場所：Florence, Italy
http://www.32igc.org/home.htm

9月　September

☆日本地質学会第111年総会・年会
9月18日（土）～20日（月）
場所：千葉大学
http://www.geosociety.jp

出 版 物 在 庫 案 内

ご希望の方は代金を添えて本会事務局宛お申込みください．なお，2冊以上のお申込みにつきましては送料をお問い合わせください．
現金書留または郵便振替　00140－8－28067
No. 38以前の論集：院生・学生は4割引，正会員は2割引　No. 40以降の論集：院生・学生のみ2割引

地 質 学 論 集

第21号　続・日本列島の基盤．加納　博ほか編，331pp., 1982年4月刊，会員頒価2,400円，〒340円
第26号　白亜系の国際対比―現状と問題．平野弘道編，172pp., 1985年3月刊，会員頒価2,000円，〒290円
第30号　日本の第四紀層の層序区分とその国際対比．市原　実ほか編，221pp., 1988年4月刊，会員頒価2,000円，〒340円
第33号　西南日本内帯高圧変成帯とテクトニクス．西村祐二郎ほか編，357pp., 1989年4月刊，会員頒価3,000円，〒340円
第34号　堆積盆地と褶曲構造―形成機構とその実験的研究―．三梨　ほか編，209pp., 1990年3月刊，会員頒価2,500円，〒340円
第37号　古日本海東縁の新第三系―層序・古地理・古環境．小林巌雄ほか編，326pp., 1992年3月刊，会員頒価3,000円，〒340円
第38号　変動帯における砕岩類の組成と起源―日本列島を例として―．君波和雄ほか編，401pp., 1992年3月刊，会員頒価3,500円，〒340円
第40号　中央構造線のネオテクトニクス―その意義と問題点―．岡田篤正ほか編，250pp., 1992年12月刊，会員頒価3,200円，〒340円
第41号　中部九州後期新生代の地溝．長谷義隆ほか編，192pp., 1993年6月刊，会員頒価3,100円，〒290円
第42号　西南日本の地殻形成と改変．小松正幸ほか編，357pp., 1993年4月刊，会員頒価3,100円，〒340円
第43号　浅部マグマ溜りとその周辺現象の地球科学．村岡洋文ほか編，177pp., 1994年4月刊，会員頒価2,000円，〒340円
第44号　島弧火山岩の時空変遷．周藤賢治ほか編，335pp., 1995年11月刊，会員頒価2,800円，〒340円
第45号　~~シーケンス層序学―新しい地層観を目指して．斎藤文紀ほか編，249pp., 1995年8月刊，会員頒価2,500円，〒340円~~（売り切れました）
第46号　火山活動のモデル化．佐藤博明ほか編，162pp., 1996年9月刊，会員頒価1,900円，〒290円
第47号　日高地殻―マントル系のマグマ活動．荒井章司ほか編，323pp., 1997年4月刊，会員頒価3,000円，〒340円
第48号　Cretaceous Environmental Change in East and South Asia（IGCP350）Contributions from Japan―　岡田博有ほか編，188pp.，1997年6月刊，会員頒価2,100円，〒340円
第49号　21世紀を担う地質学．新妻信明ほか編，232pp.，1998年3月刊，会員頒価2,500円，〒340円
第50号　構造地質　特別号―21世紀の構造地質学にむけて―．狩野謙一ほか編，263pp.，1998年7月刊，会員頒価2,500円，〒340円
第51号　地震と地盤災害―1995年兵庫県南部地震の教訓―．岡田博有ほか編，162pp.，1998年3月刊，会員頒価3,000円，〒340円
第52号　オフィオライトと付加体テクトニクス．宮下純夫ほか編，316pp.，カラー10pp.，1999年9月刊，会員頒価3,000円，〒340円
第53号　本州弧下部地殻と珪長質マグマの生成・活動システム．加々美寛雄ほか編，401pp.，1999年11月刊，会員頒価3,900円，〒450円．
第54号　タフォノミーと堆積過程―化石層からの情報解読―小笠原憲四郎ほか編，197pp.，1999年12月刊，会員頒価2.900円，〒340円．**（入荷しました）**
第55号　ジュラ紀付加体の起源と形成過程．木村克己ほか編，221pp.，2000年1月刊，会員頒価2,800円，〒340円．
第56号　古領家帯と黒瀬川帯の構成要素と改変過程．高木秀雄ほか編，253pp., 2000年3月刊，会員頒価2,900円，〒340円．
第57号　砕層岩組成と堆積・造構環境．公文富士夫ほか編，240pp., 2000年9月刊，会員頒価2,800円，〒340円．

リーフレットシリーズ
大地の動きを知ろう―地震・活断層・地震災害―　1995年4月発行　会員価格200円（非会員300円）
大地のいたみを感じよう―地質汚染Geo－Poollututions 1997年2月発行　会員価格200円（非会員300円）
大地をめぐる水―水環境と地質環境―　2001年5月発行　会員価格300円（非会員400円）

下敷き：「干渉色図表」・「偏光顕微鏡による鉱物鑑定表」（英語版）1枚200円（非会員300円）

講演要旨集ほか
第109年学術大会講演要旨集（2002年9月刊，新潟）会員頒価3,500円，〒500円
第110年学術大会講演要旨集（2003年9月刊，静岡）会員頒価3,500円，〒500円
第110年見学旅行案内書（2003年9月刊，静岡）　会員頒価1,500円，〒350円
（静岡大会セット購入の場合送料実費請求）

クリアファイル：学会オリジナル．A4版透明タイプ　会員頒価　1枚100円

The Islands Arcは，年4回発行されます．最新号のVol. 12 Issue 4が2003年12月に発行されました．日本語要旨をニュース誌と学会ホームページ（http://www.geosociety.jp）にも掲載しています．全文はオンライン（http://www.blackwell-synergy.com）で無料閲覧できますので，是非ご覧下さい．

本年１月より新しく編集長に就任されました石渡明・Simon Wallis両氏をご紹介させていただきます．

（The Island Arc連絡調整委員会）

The Island Arc編集長就任に当たって

石渡　明

The Island Arcは今年で13年目を迎え，初代の平　朝彦氏・小松正幸氏，二代目の小川勇二郎氏・巽　好幸氏に続き，我々が三代目の編集長に就任することになりました．世間ではよく，一代目が築き，二代目が守り，三代目が潰すと申しますが，そうならないよう，そしてThe Island Arc誌を質・量ともにますます発展させるよう，編集実務担当の渡部芳夫氏・竹内圭史氏や一新される編集委員の方々と協力しながらがんばる所存です．

The Island Arcは，その表紙に明記されている通り，日本地質学会の公式英文誌であり，日本第四紀学会，日本岩石鉱物鉱床学会，日本古生物学会，そして資源地質学会の協力のもとに，オーストラリアのブラックウェル社から発行されています．この雑誌の編集方針は各号の見開きに印刷されており，そこには，「西太平洋沿岸，アジア，そして世界各地で発展しつつある地球科学研究に対して，迅速かつ国際的な高レベルの出版の機会を提供する．現在及び過去の海溝，島弧，陸弧，背弧海盆，そして衝突帯を含むプレート収束域の構造，運動，進化に焦点を当てる．（中略）本誌はこれら重要な地球科学的対象についての高い学術レベルと広い国際的認知に裏付けられた研究発表と議論の場になることを目指す」と書かれております．アジア地域の地球科学を標榜する国際学術誌は他にもあり，現在The Island Arcのレベルがそれらの中でトップというわけではありませんが，今後はThe Island Arc（暗に日本を指す）だけでなく，海洋性島弧やその周辺の海洋底，陸弧やその周辺の大陸地域など，広くIsland Arcsを包含する「沈み込み帯域学」の総合誌として発展させていきたいと考えます．更に国際的な認知度を上げて世界各国からの投稿を促すべく，2004年IGCフィレンツェ大会などの国際学会で宣伝に努めます．

地質学会会員の皆様には，是非ともご研究の成果を完成度の高い英語論文として積極的にThe Island Arcへご投稿いただきますよう，また国内・国外のご友人に投稿をお勧めいただきますようお願いいたします．本誌は原著論文だけでなく総説も歓迎いたします．ただし，刷り上り15ページを限度とし，超過分は1ページ¥15,000が課されます．投稿から出版までの査読・編集に通常８ヶ月以上の時間をいただきますが，速報価値のある論文は４ヶ月後に出版できるよう努めます．全ての投稿論文は当該分野の専門家２名以上が査読することになっておりますので，会員の皆様にはどうか査読にもご協力下さい．そして何よりも，地質学会会員はThe Island Arcの論文をオンラインで自由にダウンロードできますので，是非このサービスをご利用下さい．私はこれまで５年ほど地質学雑誌の編集委員を勤めて参りましたので，学術雑誌の編集の仕事がどれだけ大変なものかよく存じております．地質学会会員の皆様の暖かいご協力を切にお願い申し上げます．

On Assignment as a New Editors-in-Chief of The Island Arc

Simon Wallis

Ishiwatari san and I take over the editorial responsibilities for the Island Arc with the Journal in a healthy state. With the help of the publishers, Blackwell Publishing, and the firm guidance of the previous Editors-in-Chief, Ogawa san and Tatsumi san, the worldwide circulation of The Island Arc has grown to around 6,500. In addition, a large number of researchers are now making use of the opportunity to view and download articles from The Island Arc using the Blackwell's Synergy on-line system. About half of the articles published in The Island Arc are submitted from institutions outside of Japan and the journal has firmly established itself as a significant international earth science journal. In particular, The Island Arc has become a major forum for the publication of Asian and Pacific-Region earth science research. Ishiwatari san and I are keen to further cement this role of The Island Arc, but also to expand participation from other parts of the world, in particular Europe and America.

The experience of the executive editorial team, Watanabe san and Takeuchi san, will be important in helping us maintain a high-quality journal with wide appeal. We also hope to build on the work of previous Editors-in-Chief. In particular, we have the following three aims:

- To encourage a wider range of specialties to consider publication in The Island Arc ? for instance, paleontology and sedimentology have been somewhat under-represented.
- To expand the international appeal of the journal by encouraging more submissions from outside Asia.
- To develop and expand the strong base in publishing Asian earth science ? for instance, we would be pleased to see more work on the Himalayas and Tibet submitted to The Island Arc.

Whilst we are confident of the strengths of The Island Arc, we are also aware that this is a time when there are more journals competing for a decreasing library budget. It is also a time when it is increasingly important for researchers to publish in international journals. For the sake of developing The Island Arc and the Geological Society of Japan that it represents, we particularly encourage members of the Society to consider making the effort to submit their work in English to The Island Arc rather than a more local Japanese language journal. The more high quality manuscripts we receive, the better it is for The Island Arc, the Society and for all whose work appears in the journal.

第４回こどものためのジオカーニバル報告

芝川明義（大阪府立狭山高等学校）

2003年11月２日（日）・３日（月・祝）の２日間にわたって恒例となった第４回こどものためのジオカーニバル（以後ジオカーニバルという）が大阪市立科学館を会場として行われた．連日の悪天候にもかかわらず延べ2300名あまりの入場者があり，今年も盛況のうちに無事終了した．

ジオカーニバルは2000年７月29日に行われた「21世紀の地学教育を考える大阪フォーラム」のイベントの１つとして子どもたちに地学の楽しさを知ってもらう企画として誕生した．以来回を重ねること４度となり，現在では大阪市立科学館での大きな催し物の１つにまで成長してきた．今回は第４回ジオカーニバルを中心に簡単にこれまでの様子なども交えて報告をする．

１）イベントの内容と当日会場での様子について

２日間共，参加した子どもたちの目は生き生きとしていた．子どもたちがいろいろなものに眼を輝かせながら挑戦をしていた．そこには「理科離れ」といった言葉にはまったく無縁のような世界があった．

実施した内容は次のとおりである．定員があり参加体験型のセミナーを行ったA会場とブースで観察や工作をするB会場の２つにわけて実施をしている．

写真－１　完成したスズの化石レプリカで「ハイ，ポーズ！」

写真－２　セミナーの様子

●A会場

- **セミナーⅠ：楽しいお天気教室**
- **セミナーⅡ：ペーパー分光器を作ろう**
- **セミナーⅢ：ハワイに住むばけもの・キラウエア火山**
- **セミナーⅣ：スズで化石のレプリカを作ろう**

いずれのセミナーも開始30分前から整理券を配布した．参加できるのはジオカーニバルの趣旨に沿って「子ども」とした．大人の参加は保護者であれば子どもの付き添いという形式をとり，大人だけの参加は会場内で見学してもらうことにした．また，定員に余裕があれば，セミナー実施者の判断で大人にも参加をしてもらったものもある．

●B会場

- **ペーパー望遠鏡を作ろう**
- **星座早見・月齢早見を作ろう**
- **光る星座絵を描こう**
- **紙で雪の結晶を作ってみよう**
- **雨粒を観察してみよう**
- **石こうで化石のレプリカを作ろう**
- **ようこそ，ふしぎな石の世界へⅢ**
- **アンモナイトの断面を作ろう**
- **水槽で波を起こそう**
- **地底3000マイルの旅「地震と火山の『なぜ』に迫る」**

各出展ブースに行けばいつでも観察ができ，工作を行うことができた．ただし，出展によれば人数制限をしたところもある．例えば「石こうで化石のレプリカを作ろう」や「アンモナイトの断面を作ろう」などの出展がそれにあたる．

これ以外にも，子どもたちが生き生きと科学の世界に没頭する姿を見ることができた．下記のURLから子どもたちの様子を知ることができる．ぜひ一度ジオカーニバルのHPをご覧いただきたい．

http://geolo.sci.osaka-cu.ac.jp/geo/index.html

２）参加者からのアンケート結果

各セミナーおよびB会場見学者に対してアンケートをおこなっている．アンケート結果は次のとおりである．（抜粋）

①どちらから来られましたか（%）

	B会場	セミナーⅠ	セミナーⅡ	セミナーⅢ	セミナーⅣ
大阪	73	84	72	67	85
兵庫	13	3	9	4	4
京都	4	0	9	19	0
奈良	7	13	8	11	11
その他	2	0	2	0	0

②あなたはどれにあたりますか（%）

	B会場	セミナーⅠ	セミナーⅡ	セミナーⅢ	セミナーⅣ
小学生	43	55	60	27	85
中学生	3	3	13	12	0
高校生	0	13	0	27	4
大学生	1	0	2	0	0
教　員	7	6	7	8	0
社会人	37	19	15	15	11
その他	9	3	4	12	0

③今回のイベントをどのようにして知りましたか（%）

先生から	9
家族から	12
友人から	9
ポスターを見て	6
科学館に来て知った	46
ホームページから	9
その他	10

④楽しかったですか（%）

●全体

とても楽しかった	46
楽しかった	41
普通	11
あまり楽しくなかった	2

●セミナー

セミナー番号	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
とても楽しかった	61	55	67	96
楽しかった	36	43	33	0
普通	4	2	0	4
あまり楽しくなかった	0	0	0	0

⑤気づかれた点や感想など

・子どもの目が輝いて楽しんでいました（多数）
・各地でこのような企画があればと思います
・今後も続けていかれるよう頑張ってください（多数）
・セミナーの説明がわかりやすく楽しかった（多数）　など
・ジオカーニバル全体および各セミナーに対して肯定的な意見が上記のほかにも数多く寄せられている

⑥地球や宇宙に関する実験・観察したいテーマや疑問がありましたらお書きください

・ロボット　・ブラックホール　・太陽系のでき方
・太陽が爆発したらどうなるのでしょうか？
・地球と同じような星があるのでしょうか？
・地球のでき方　・活断層　・堆積岩のでき方
・深層水　・温泉　・飛行機から見た雲の話
・雲を作りたい　・気候の仕組み　・天気図と雲　など

多方面にわたりいろいろなテーマが出されている．今後企画を考える上でおおいに参考になる．

3）来年度に向けて

●反省会で出された意見

・おおむね成功であった　・来年度も継続をしていく
・組織体制を見直し，これまで以上にスムーズに運べるようにしていく．それとともにこのイベントに協賛し，お手伝いを願いえる方を探していく
・セミナーやブースに出展してくれる個人や団体の新規開拓を目指す
・より多くの市民に知ってもらうための広報活動に力を入れる
・ジオカーニバルの趣旨から考えて環境に関する出展を探していく
・ジオカーニバル当日のボランティアなど，人の確保を行う　など

●来年度実施ついて

2004年はジオカーニバルを始めて５年目という一つの節目を迎える．今年の反省を踏まえてよりよいジオカーニバルを目指したい．実施日については2004年11月６日（土）・７日（日）の２日間で行う予定である．2004年２月１日（日）より実施に向けて企画委員会開催の予定

4）第１回から第４回までの経過

2000年７月29日に行われた「21世紀の地学教育を考える大阪フォーラム」のイベントの１つとして実施された．以後，ジオカーニバルはフォーラムの大きな財産として会場を大阪市立科学館に移して行われ，現在に至っている．

第１回から第３回まではアジレント・テクノロジー株式会社企画部が行っている「ひらめき工房アジレント」の助成，今回は「子どもゆめ基金（国立オリンピック記念青少年総合センター）助成活動」を得ることができた．

第４回を含めて過去のジオカーニバルの様子は次のURLからうかがい知ることができる．

・21世紀の地学教育を考える大阪フォーラム
http://geolo.sci.osaka-cu.ac.jp/
・第４回こどものためのジオカーニバル
http://geolo.sci.osaka-cu.ac.jp/geo/index.html

5）最後に

2004年以降も継続してジオカーニバルが実施される事を願うとともに地学の楽しさを子どもたちに知ってもらうためにも日本各地でこのようなイベントが行われる事を願っている．

写真－３　星座早見・月齢早見を作る

写真－４　「水槽で波を起こそう」にチャレンジ！！

写真－５　雨粒つくりに挑戦中！！

院生コーナー

地球深部探査船「ちきゅう」見学記

九州大学地球惑星科学部門地球進化史分野
大岩根　尚（4年）

「でかい！」長崎湾の対岸に見えるその船を見て，まずそう思いました．そこでは，現在建設中の地球深部探査船「ちきゅう」がこれからの出動に備えて着々と準備を進めているところでした．全長210m，幅38m，総トン数57,500tにもなる堂々たる大きさ．船体中央に組まれた櫓の高さは水面から120m以上にもなります．我々九州大学地球惑星科学科では一般公開されていない建設中の船内を，海洋科学技術センターと三菱重工業のご好意で11月30日に特別に見学させていただきました．今回は現在建設進行中の「ちきゅう」の姿について報告します．

三菱重工業香焼工場に着いた私たちは，まず「ちきゅう」についての説明を受けました．深海底の掘削を目的としてつくられている「ちきゅう」は，世界で初めてライザー掘削技術を備えた研究船です．“ライザー”とは，ドリルと船をつなぐケーブルを覆うパイプのことで，この中をコアが通っていくことになります．パイプの中は泥水で満たされており，常に循環しています．この泥水があることで孔内の圧力や温度を一定に保ち，より効率的な掘削が可能になります．また，パイプを通して泥水を循環させることで，それまで採取できなかった泥や運ばれてくる砕屑を分析することができます．そうすることによって，地下深部の情報を詳しく読み取ることができるそうです．また，もし予期しない暴噴などが起こった場合の対策もとれ，周囲が汚染されるのを防ぐこともできます．約２週間前に雲仙で行われていたICDPのトレーニングコースに参加していた私はそこでの知識が役立ち，この内容は非常に分かりやすいものでした．雲仙では地上に据えた櫓から掘削していてもトラブルなどが起こるということでしたが，「ちきゅう」はそれを不安定な船の上から行おうとしているのですからこれは大変な技術だと思い，ただ感心するばかりでした．4000mも5000mもある，長いスパゲティもしくはクモの糸のようなパイプを折り曲げないように，波も海流もある海上で船をずっと定点に固定するDPSという技術も大したものだ，と感じました．

櫓．キャットウォークから眺める．４本を一挙に組み立てて掘り進むことができる．

そのような説明を受けた後は，二班に別れていよいよ「ちきゅう」へと向かいました．造船所の中では高さ100m近い巨大なクレーンや船の部品など，そこにあるもの全てがでかい！こんな巨大なでかい部品の集合体の「ちきゅう」とは？，想像をどんどん膨らませている間についに建物の影から岸壁に横づけされている「ちきゅう」の姿が目に飛び込んできました．

冒頭にも書いた通り，まずその圧倒的な迫力に圧倒され，船の周りにはカマキリの腕のような黄色いクレーンが幾つも見えました．船は大きすぎて，近くからでは写真に納まりきらず，船というよりは海上にそびえる巨大建造物，という方が正しいと感じました．

前からの遠景．櫓がたったので掘削船らしくなる．長崎の街からも遠くにみえる．

ヘルメットをかぶった私たちは，階段を何段も上がり，途中DPSの一端を担う灰色の巨大なスラスター（船の横方向の運動を制御するスクリュー）がありました．最上部に上がると，巨大なヘリポートデッキがあり，下の陰に隠れるように操縦室がありました．最新鋭の機器が搭載される船内は非常に広く，新しい車の中のようなにおいで，ガラスの部分にはまだ段ボールやテープが貼ってあります．操舵室では，スラスターなどのコントロールパネルがぎっしり詰まっており，椅子も移動可能な特殊なものでした．こんなに巨大な船なのに操縦する舵ハンドル？は自動車用のものより小さく，基本的にはすべて電子制御ということで，テクノロジーにまたびっくりでした．

操舵室から左舷側に抜けると，櫓がみえました．何と言っても，高い！　ICDPトレーニングで見学した雲仙普賢岳の火道を掘抜くドリリングサイト，USDP site-4で見たものは確か50mくらいだったので，高さだけで２倍以上もあることになります．そんなものを船の上なんかに取り付けて本当に大丈夫なのだろうかと，不安にさらなるほどでした．

さらに近付いてみるとますます櫓は天を突くようで，その大きさが実感できます．パイプを収納する櫛形のラックの部分やコアキャッチャーなどの説明を受けました．やはり，ここにあるクレーン等の機械類もひとつひとつが大きく，静止していても十分迫力があり，それらが実際に動いている場面を想像するだけで鳥肌ものでした．

そこから研究区画に入りました．中はがらんとして，分析用の大型機械などはまだ搬入されていません．「ちきゅう」が動くのはまだ先の話なので，今新しいものを入れたとしても使う頃には古くなってしまうから，とのことでした．真新しい内装の研究区画を見ながら，２年後にまさにこの場所で研究者たちが実際にコアを扱って研究していることを想像したり，その中に自分が…と考えると，体の中を熱いものが駆け巡るのを感じました．

改めて考えると，もともとこの船は人類が地球のことを知りたいという探究心から造られたものです．その探求心がこんな大きな船という形になっていることを考えると，改めて人間の好奇心の偉大さや逞しさを感じました．また，この船の航路の先にこれからも発展し続けていくであろう地球科学の大きな光が見えた気がしまし

研究室．まだ実験器具がなにもないが非常にひろい．このような部屋が何個もある．

た．

今回の見学会は，九州大学理学部地球惑星科学科が毎年学部二年生を対象に，厚生補導や懇親のため雲仙の地震火山観測センターの見学等を行っている一泊二日の特別野外実習の一部でした．今回は「ちきゅう」が長崎に寄港しているということで特別に全学年の学生から参加希望者を募り，「ちきゅう」を見学させていただきました．時間は前後しますが，この特別野外実習では，一日目に別府－島原地溝帯の北縁にあたる千々石断層や雲仙温泉，1991年～1995年にかけて起こった普賢岳噴火の火砕流によって破壊された旧大野木場小学校などを見学しました．夜は体育館で汗を流し，引率の高橋孝三先生と清川昌一先生のゼミ，そして懇親会では，普段話す機会

「ちきゅう」をバックに記念写真（１班：35人）

の少ない他学年どうしで語り合ったり，先生を囲んで熱い研究の話などに花が咲いて，深夜まで大盛り上がりでした．先生や先輩などの授業では聴けない科学にまつわる話とこれからの地球科学への未来について考えさせられました．

今回の実習で，私たちは地上で見える断層や熱水の活動を体感し，そして「ちきゅう」を見学して，最新のテクノロジーを生かして地球の謎をいかに解いていくかを学びました．「ちきゅう」を見学後，日本の最古の変成岩である野母崎変成岩を巡検し，「ちきゅう」で掘抜く「実際の地球」がどのようになっているかをはじめて真剣に見た気がしました．見学に行った約70名の中から，これからの地球科学を担う優秀な研究者が育っていくのを期待せずにはいられませんでした．また，自分もその中の一人でありたいと強く思いました．

支部コーナー

☆中部支部　案内

2004年中部支部年会のお知らせ

2004年地質学会中部支部年会を右記のとおり開催します．今回は富山県在住の支部会員が中心となって開催し，日本海海底や対岸（ロシア沿海州）にも関わるシンポジウムと富山県南部（一部，岐阜県を含む）の地質巡検を行います．年会内容の詳細及び参加登録等については，本誌3月号に掲載の予定です．皆様のご予定にぜひ入れておいてください．

１．日程
2004年６月12日（土）　総会・シンポジウム・懇親会
2004年６月13日（日）　地質巡検
２．シンポジウムタイトル
「日本海と本州弧の形成・発展」
３．巡検
飛越地域の地質と構造に関連した露頭や活断層などを見学
４．会場
富山大学理学部内

問い合わせ
〒464-8602　名古屋大学理学部地球惑星科学教室気付
日本地質学会中部支部事務局　竹内　誠
TEL：052-789-2525
E-mail:takeuchi@eps.nagoya-u.ac.jp

追　悼

山本博達学兄をしのぶ

本会正会員（108年総会にて50年会員として表彰），福岡教育大学名誉教授山本博達さんは，2003年７月25日の午前０時過ぎ，古賀市の国立療養所福岡東病院で急逝された．享年78歳であった．昨年の秋ごろ，３年前に患った大腸ガンが頸部のリンパ節に転移し，それ以来，入退院を繰り返しながら治療に専念していた．７月初めにお見舞いしたときには，抗ガン剤治療の副作用で食事が喉を通らない状態であったが，あまり衰えたようすはうかがえなかった．むしろ元気に，ガンは縮小傾向にあるので，退院したらADSLでインターネットやメールをじゃんじゃんやりたい，と話していた．安心して病院を去ることができた．それなのに，その２週間後に突然，幽界に旅立たれようなどとは夢想だにもしなかった.生死不定とはいえ悲しく,悔しくてならない．

山本さんは，1924年12月５日北九州市に生まれ，旧制八幡中学校，旧制熊本高等工業学校をへて九州大学理学部地質学科に入学，1950年３月卒業に引き続いて同大大学院特別研究生前期課程に進学，後期課程途中の1954年10月に福岡学芸大学久留米分校に就職した．助手・講師をへて1962年４月助教授，名称変更後の福岡教育大学で1971年４月教授に昇任，1988年３月に停年退官された．

この間，1962年２月に九州大学から理学博士号を取得し，1966年８月～1967年11月の間，Post－doctoral Fellowshipとしてカリフォルニア大学のG. C. Kennedy教授のもとに留学した．また，九州大学理学部・同教養部，佐賀大学文理学部・同農学部，西南学院大学で非常勤講師を勤め，さらに，1982年７月から２年間，福岡教育大学学生部長として重責を担った．退官後には，宗像市とその近郷の市町村史の編纂に参画し，また，平成地研株式会社の顧問として若い地質技術者の指導にも尽力している．

このように，33年半にわたる大学在職中の研究・教育活動をとおして貴重な研究成果をあげ，多くの優秀な人材を教育界・実業界に送り出すとともに大学運営に，また，特に退官後には地域社会に貢献している．これらの功績により，ご逝去後に勲三等瑞宝章を授与された．

山本さんは，一貫して中部～北部九州の変成岩と深成岩の研究に取り組んでいたが，1970年代には一時，北西部九州のグリーンタフ変動関連の火山岩類への回帰もみられる．この間，科研費による総合研究を契機にしばしば共同研究を組み，互いに励まし合い支え合いながらやってきた．幽明境を異にした今は，懐かしさばかりがこみあげてくる．山本さん楽しい時をいっぱいありがとう．

山本さんの，1949年４月から始まった卒論研究は，佐賀県伊万里市西方の火山岩類であったが，卒業して大学院にすすむと同時に，熊本県の肥後地域の変成岩・花崗岩類の研究に転向した．当時九大地質学教室では，岩石学講座担当の杉　健一教授が亡くなられ（1948・７），代わって大陸から帰国された冨田達教授が1949年５月に着任されたばかりであった．

そんな事情で1950年から新たな調査研究を開始した山本さんは，当時この八代地方の変成岩・花崗岩地域をも精査されていた松本達郎先生のご指導を受ける幸運に恵まれた．そしてわずか３年後の1953年には，その後，後続の研究者によく引用されてきた肥後片麻岩地域の地質図を松本先生と連名で発表している．

その論文（九大理学部研究報告４巻２号，1953）で山本さんは，肥後変成岩と宮の原花崗岩との接触部における火成源と堆積源のジルコンが混在する混成片麻岩の発見を報告した．当時，冨田先生が提唱された“ジルコン法”の変成岩研究への一つの応用例として注目された．つづいて1954年にも，熊本県北部の筑後変成岩－玉名花崗閃緑岩との接触部において同様な混成現象を見いだしている．

山本さんの代表的な研究「Plutonic and metamorphic rocks along the Usuki-Yatsushiro Tectonic Line in the western part of central Kyushu」（学位論文）（福岡学芸大学紀要12号，1962）は，九州での本格的な変成岩研究の草分けとして後続の研究者に刺激を与え，議論の対象になってきた．特に，泥・砂質岩中のパイラルスパイトのMn含有量が，都城（1958）が研究した御斎所－竹貫地方の変成岩のものと同程度で，その性格は同じであると論じ，地体構造論上の位置づけに一石を投じた．その後も，肥後変成岩におけるざくろ石角閃岩やグラニュライト相の発見とか竜峰山帯に貫入した宮の原トーナル岩起源のマイロナイトの認定など，肥後地域の地質学的意義の解明に重要な新知見を発表している．

1960年代後半には，熊本県の木山変成岩および筑肥山地南部の変成岩からそれぞれ，らん閃石やバロア閃石およびパンペリー石やローソン石などを見いだし，いずれもらん閃石変成作用の特徴を示すことを明らかにした．のちに間の谷変成岩からもローソン石を発見している（1989）．それから，佐賀関半島の三波川変成岩，宮崎県の四万十帯，さらに北部九州の三郡変成岩へと研究を広げ，その縦横無尽の活躍は南部九州をのぞくほぼ九州全域に及んでいる．

この間，1965年にスタートした「変成帯形成史」（代表者加納　博先生）以来，数次の総合研究では，山本さんをふくむ九州の５人が中心になって九州の変成岩の共同研究にあたった．なかでも，黒瀬川構造帯レンズ状部における塩基性グラニュライトの新発見や特徴的な変成鉱物による岩石学的性格の究明など，いささかでも貢献できたのは山本さんに負うところが大きい．調査ではいつも先頭に立っていた姿が思い浮かぶ．また，総合研究「領家帯の岩石学的研究」（1980～1981）では代表者として研究の進展に尽力された．

こうして山本さんが九州の変成岩・深成岩研究に残した足跡は，またと得がたい貴重な遺産である．

山本さんはいずれかといえば寡黙・温厚で，人間味豊かな人であった．また，あまり物事にこだわらず，多くの人に好感をもたれていた．好奇心が強く旅行好きで，海外にもよく出かけ，デジカメをいち早く購入してからは，ときどき旅先の写真をeメールで送ってくれる優しさがあった．また，辛党としては一方の雄と目されていた．ぐいぐいピッチを上げるほうで，酔いが回ると得意のカラオケが始まり，その情感豊かな歌声にまわりは皆陶酔させられたものである．

山本さんは，亡くなる１ヶ月前の６月に島根県の津和野町に家族で旅行され，小藤文次郎先生の生誕地を探し歩かれたという．「わが国地質学会の始祖」（諏訪兼位さんによる碑文から）とうたわれた小藤先生の記念碑を，体調が万全でなかったときにわざわざ訪ねてみたいほど，地質学の大先輩への畏敬と憧れの念を強く抱いていたのであろう．山本さんの一面をかいま見た気がする．胸を打たれた．

もしあの世というものがあるのなら，ぜひ再会して談論し，盃をかたむけながらまたあの美声を心ゆくまで聴いてみたいものである．謹んでご冥福をお祈りする．合掌．

なお，奥様の山本睦子様は従来通り下記にお住まいである：
〒811－4163　宗像市自由ヶ丘３丁目11－10

（唐木田芳文）

学　会　記　事

2004年度第４回理事会議事録

期　日：2003年12月３日（水）
13：50～18：45
場　所：地質学会事務所
出席者：平会長，加藤副会長，木村副会長，渡部常務理事，玉生副常務理事，運財-大友・上砂，学研-徐・伊藤・脇田，編出-狩野・会田，普教-中井，橋辺（事務局）
欠席者：天野・公文・宮下・吉田

報　告

１．運営財政部会（部会長-天野　副部会長-大友，上砂）
総務委員会（委員長-天野）
庶務関係（担当-天野）
・三菱財団より，平成16年度「自然科学研究助成」公募について：１月７日から２月４日募集→News誌12号ならびにWebサイトに掲載する．
・（社）土壌環境センターより「第7回国際土壌・地下水環境ワークショップ」後援依頼：2004年１月22日　於東京国際フォーラム→例年どおり了承の返事を出した．
・前回了承した国際堆積学会共催に関し，11月25日付で学術会議へ共催申請書を提出した．
・「子供のためのジオカーニバル」（本会後援）終了の報告が，同企画委員会よりあった．
・「2003年土壌・地下水浄化技術展」（本会後援）終了の報告が日刊工業新聞社よりあった．
・「第29回リモートセンシングシンポジウム」（本会協賛）終了の報告が（社）計測自動制御学会よりあった．
・日本科学技術振興財団より「第45回科学技術映像祭」への応募と広報について依頼　応募〆切2004年1月31日→例年どおりNews誌に掲載，Webサイトにリンクすることとした．
・フジテレビ報道局より「巨大地震VSメディア」公開シンポジウム開催案内11月21日：フジテレビ本社→地質災害委員会のメーリングリストに流した．
・（社）日本水環境学会より「第38回年会開催案内」2004年3月17日～19日：札幌市コンベンションセンター→News誌，カレンダーに掲載予定，Webサイトにリンクした．
・国土技術制作総合研究所講演会開催案内12月10日：イイノホール→Webサイトにリンクした．
・「第16回国際環境生物地球化学シンポジウム」終了の報告とお礼が同組織員会からあった．

会員関係（担当-上砂）
１）入退会の承認
入会　正（２名）山崎唯史・横尾頼子
院割（４名）赤川史典・石川仁子・森　尚仁・山本真也
退会（賛助２社，正69名（内院割５名））：2003年12月末にて退会
埼玉県環境科学国際センター（２口）・エヌエス環境株式会社（２口）
相澤直人，青木謙一郎，浅見正雄，石井岳男，石田眞一，糸賀秋臣，井上理，井門令子，岩淵義郎，宇井忠英，江頭裕美，生沼　郁，大岡弘一，大木達夫，大清水岳史，大西智恵美，岡井大八，尾形英雄，岡本和彦，岡山裕一，金子吾朗，金光勝明，国松　豊，熊崎健太郎，熊本智之，古城智子，小林晶子，小林久子，堺　理夫，佐々木寿，篠原邦彦，柴　達雄，庄谷幸夫，末岡正嗣，菅本尚子，杉末一政，杉村昭弘，杉山　健，高井浩深，高橋明子，高橋隆孝，田中謙一，田中威・谷　正巳，陳　毅風，出口信幸，寺島　滋，友田淑郎・西野真一郎，浜田成久，速水格，深田　憲，藤沢恒雄，渕上芳孝，古江正敏，古川英照，邊見妙知，松浦旅人，松岡　功・松永正雄，松原　仁，松久幸敬・宮下　忠，矢入憲二，山口信，山盛邦生，吉田博直，吉田栄夫，Liam　Nesfied
逝去（名誉１名，正２名）
橋本隆夫（03年９月），正谷　清（03年６月），早川正巳（名03年11月27日）
２）11月末現在会員数　賛助41，名誉76，正4,856（内，院割265），学生41合計5014名
退会者と未納者への対応は自ずと異なる．未納者には今年は３回会費請求を行っている．退会者は本人の意思で退会届けを出しているので，特別慰留などの手紙は出していない．定年を機に退会する人が多いので，シニア会員のようなことを考える必要があるかもしれない．会員および会計担当で今後検討することとする．
関連学会連合（担当-天野）
・地質科学関連学協会連合
・地理関連学会連合
・自然史学会連合
森田利仁委員より，次期連合代表には，鎮西清高（大阪学院大学教授，京都大学名誉教授）氏が選出されたことが報告された．
会計関係（担当-大友・上砂）
・会計報告（10月までの会計報告と決算見込み）（議題へ）
・静岡大会の収支報告が静大生協より出された．結果として95万円程度の余剰金が出ている．静岡市からの補助金114,000は現在申請中であり，まだ交付されていない．

広報委員会（担当-大友）
ニュース誌編集小委員会（委員長-大友，担当-大友）
・ニュース誌編集状況
12月号　2004年度各賞候補者募集/The Island Arc Vol.12 Issue４，日本語要旨/新たな地質情報戦略と地質学会の機能/委員会だより　生涯教育委員会　研究機関指定まで/院生コーナー/支部コーナー　四国支部総会報告　その他，選挙についての広報
・委員：高橋正樹，玉生志郎（地質災害），徐　垣，田口公則（生涯教育），地学教育担当から１名を予定
・高橋委員から地質科学の先端的研究課題をトピックスとしてわかりやすく解説する記事の連載企画が示された．
インターネット運営小委員会（委員長-渡部直喜，担当-大友）
・委員については，現在の委員に確認のうえ決める．
・ニュース誌の原稿をPDF化して，HPにも生かすようにする．HPのモニター会員をおいて，HPをより良くする工夫をしてはどうか．一般会員の投稿も受け付けるようにしてはどうか．これらについて次回，次々回までに会長に答申してもらうこととする．

２．学術研究部会（部会長-徐，　副部会長-伊藤，脇田）
行事委員会（徐委員長）
・千葉大会準備委員会が，11月26日第２回実行委員会を開いた．
実行委員会の伊勢崎・伊藤会員，準備委員会の大原・廣井会員をはじめとする関係者，協力者15，6人が集まり，千葉大会の行事内容（特に柱となるべきテーマや，セッションはポスターに重点を置くなど），現在までの準備状況，今後の協力体制，資金面などについて話し合われた．会場予定の体育館，教室などを視察，問題点を確認しあうなど意見を交わした．
・地質学会が変わったことを，どのようにアピールしていくか，検討が必要である．
・地質学会の各専門部会，委員会等がそれぞれ何ができるか提案してもらう機会を設ける．

・例えば，１ブース約１万円程度で，発表場所を提供するようにする．振興調整費のプロジェクト等は，ブース販売の対象となりうる．
・様々な企画をやるために，個人発表形式を口頭からポスターにシフトせざるを得ない．千葉大会では口頭発表は300件，ポスター発表は450件とする．
・総会，懇親会は９月18日（土曜日）に開催することとする．
・千葉大会を盛り上げるため，ポスター作成，他学会への宣伝，HPでの宣伝などを検討する．
・予稿集投稿のオンライン化（学会発表登録を含む）を検討し，可能であれば実施する方向で，オンライン化委員会・インターネット委員会・行事委員会等に早急な検討を要請することとした．

専門部会連絡委員会
国際交流委員会（委員長-脇田浩二）
環境地質研究委員会（研究委員会長-羽田忍）
ヒマラヤ地質研究委員会（委員長-在田一則）
地質学と地震研究委員会（委員長-嶋本利彦）
南極地質研究委員会（委員長-廣井美邦）
・評議員会への報告あり
地質環境の長期安定性に関する委員会（委員長-高橋正樹）
・月刊地球に原稿投稿中

３．編集出版部会（部会長-狩野　副部会長-宮下，会田）
地質学雑誌編集委員会（委員長-狩野　副委員長-宮下）
・地質学雑誌編集状況
109-11：発行済み，109-12：校正中
・今月の編集状況．（12月２日現在）
本年度投稿論文数73編［論説57　編（和文53欧文４）短報15（和文12　欧文３），ノート１（和文１）］口絵11（和文５欧文６）
昨年比　-12，査読中　44編
・編集規約の一部改定（議題へ）
企画出版委員会（担当-吉田）
・論集刊行規定の改定：永広前担当執行委員からの引継ぎ（議題へ）
文言の「執行委員会」はすべて「理事会」に変更する必要があり，確認の必要有り．
・委員は現状，高橋正樹・永広昌之の２名．もう少し人が必要．
・「地震イベント堆積物-」（編集代表藤原　治）に理事会推薦の編集委員を至急出す必要が有る．吉田武義理事を指定することにした．
The Island arc 連絡調整委員会（担当-会田）
・来年度以降の契約更改について
・アジア諸国の会員がオンライン購読できるようにサポートを検討していく．
・学会ホームページからオンラインジャーナルへ自動接続する方法をオンライン委員会に検討してもらっている．
・会員向けのページを作る必要がある．

４．普及教育事業部会（部会長-公文　副部会長-中井，吉田）
学校教育委員会（委員長-阿部）
・千葉大会に向けて，準備委員会による教員層に対する関連行事の企画「地球科学研究の最前線見学会」を３回程度予定している．
第１回11/29：「桐生-小田原測線」反射法地震探査見学会．
・地球惑星合同学会「地学教育」委員会関連の報告（中井）
地質学会として参画し，プレゼンをしていく方向で意志表示する．
・理数系学会教育問題連絡会にも関わっていく．
・戦略的に切り込む部分は理事会担当とし，現場の問題は学校教育委員会に対応してもらう．
・学校教育委員会と地学研究委員会の一体化については，今後検討を継続する．
生涯教育委員会（委員長-柴）
・評議員会報告を確認．
地質基準委員会（委員長-新妻）
地層名委員会（委員長-天野）

５．その他-１
支部長連絡会議（担当-玉生）
・11月22日，第３回四国支部大会開催，新支部長は吉倉紳一氏（高知大学）となったことが，井内前支部長より連絡があった．
地質災害委員会（担当-玉生）
・地質災害委員の交代
四国支部：井内美郎→吉倉紳一，火山部会：三宅康幸→千葉達朗
・初動調査対応策について（玉生）
・千葉大会での地質災害セッション応用地質学会との共催（伊藤）
JABEE委員会（委員長-三宅）
・評議員会報告の確認
技術者継続教育委員会（委員長-公文）

【以下，評議員会の下の委員会】
各賞選考委員会（委員長　新井田清信）
・各賞の募集について，News誌12月号に記事を掲載する予定で現在準備中．
名誉会員推薦委員会（委員長-加藤副会長）
科研費委員会（委員長-竹内　章）
・科研費委員の推薦作業については現在進行中で，13日の評議員会までにはまとまる予定．
学術会議連絡委員会（委員長-木村）
・19期研連委員名簿：現在確認できている，地質学研連，古生物学研連，環境理学研連，海洋科学研連について紹介．
地学教育委員会（委員長-佐瀬）
・11月14日，地学教育セミナー（地団研，地学教育学会との共催）を開催．
女性地球科学者の未来を考える委員会（委員長-田崎）
研究企画委員会（委員長-未定）
法人化準備委員会（委員長-木村副会長，幹事委員　立石，担当-渡部・玉生）
・12月３日，18時より法人化準備委員会を開催予定
・12月３日，17時より募金委員会を開催予定
・11月28日現在，実質的な募金額は，2,529,250円，醵金者は67名，１グループである．今年中に1000万円を目指したい．
・委員の拡充：支部長や各大学のキーパーソンなどを追加したい．
・募金委員会の事務局的な仕事を，竹内委員にお願いしてはどうか．
・12月13日評議員会後の懇親会（18：00から）に，名誉会員を招きたい．
倫理規定策定委員会（委員長-松本　良，担当-伊藤）
・11月27日，18時30分より委員会を開催
知的財産権等検討委員会（委員長-上杉陽，担当-伊藤）
・11月18日，18時より委員会を開催した．
・千葉大会電子登録の件（伊藤・渡部）→議題へ
オンライン化委員会（委員長-鈴木徳行）
・年会発表の電子登録フォーマット案を評議員会に提案予定．評議員会報告確認．
選挙管理委員会（担当-天野）
・11月22日選挙管理委員会を開催した．委員の互選で手塚裕樹氏を委員長に選出した．
・新会則，選挙細則に基づく次期の選挙と前回の理事会決定などについて説明し，審議した．
役員の任期，代議員の全国区，地方区の選び方などについて，現状では非常にわかりにくく，選挙を実施するうえで困難であることが指摘された．（委員会報告書確認）
・ニュース誌12月号に掲載の選挙関係記事については，理事会のアナウンスとして掲載すること，１月号には選挙管理委員会として正式な選挙公示をすることを確認した．

議　題
１．移行過程における選挙の実施（事務局，総務報告）
・選挙管理委員会報告を受けて，役員任期，全国区・地方区の仕分け等
・選挙細則の一部改定について
・立候補者の擁立・説得・確保
前回の理事会案への選挙管理委員会のコメント

・複雑すぎて，とても実行不可能．
・代議員の全員一斉改選で実施できないか．

理事会の判断

・理事を半数交代して引き継ぐことは，実質考慮する必要がないと思われる．選挙をわかりやすくし，候補者が出やすいよう，現在の評議員，理事全員の任期を来年の総会までとして一斉に改選をする．
・代議員立候補者数を充足できるような戦略をたてる．
・選挙細則，選挙内規，選挙管理委員会規約は，評議員会に出すため至急内容の確認と修正する．

2．法務委員会発足の件（渡部報告）

・現状での各種法的実務対応の整理
・法人化への法的実務的準備／法人化委員会との仕分け→理事会の下に法務委員会として再編
・委員長は上砂理事とする．
・法人化委員会からの法務委員に，立石委員を指名した．
・講演要旨の受付は，どのように行うべきか？
・学会発表をacceptするかrejectするかは，コンビーナーが講演要旨を参照して判断することとする．
・テクニカルな問題点は，法務委員会と行事委員会で議論整理することとする．

3．高木宏行弁護士の顧問契約の件（事務局報告）

高木弁護士からの契約書案を確認し，理事会承認した．

4．各種委員会（各部会）規約・委員の確認

・地質災害委員会規約および初動調査対応策について（玉生理事提案）

平会長から，既に各支部に対しては「初動調査対応策について」，専門部会に対しては「地質災害調査の調査マニュアル作成に向けて」ということでお願いしているが，特に後者については再度依頼を郵送するよう要望があった．

＜ニュース誌編集小委員会（総務委員長）＞

・地質学論集刊行規定の改定→承認
・編集規約の一部改定→承認

5．地質学雑誌のあり方について（木村副理事長）

木村副会長から提案された標記につき，以下のような議論がなされた．

・2004年９月号から新しい雑誌に変更できるか？
・地質学雑誌の重要な部分となっている地域地質の論文を，どのように対処するべきか？
・デメリットの部分は，アイランドアークを活性化することで対応できるのではないか？
・アクティブに編集することが必要ではないか？
・特集号を継続させることでは解決できない？
・地域記載の論文が地質学雑誌からなくなると，論文が減少してしまう．
・地学雑誌と地質学雑誌との住み分けをどのように考えるのか．この方針では地質学雑誌が地学雑誌化してしまう恐れがある．
・地質学雑誌に総説が，１編のるようなことを考えたらどうか？
・編集委員会をどのように組織化していくか，見解を取りまとめていく必要がある．
・ニュース誌に対し出されている高橋正樹氏の提案は，むしろ地質学雑誌に掲載するよう検討する．
・千葉大会における地球環境に関するシンポジウムのレビューを地質学雑誌110巻8号に掲載し，特集号としたい．
・出版物全般の今後の戦略を，評議員会に諮っていくとともに，理事会でも諮問委員会を設置して検討していく．諮問委員会委員長：加藤副会長，副委員長：宮下理事，委員：木村副会長他

6．評議員会議題の件

・2003年度決算見込み案および2004年度予算案

決算としては，支出が押さえられておりあまり問題はない，支部補助金について，かなり支部活動も活発になり今後の活動を奨励する意味でも今年度の予算額を各支部に均等割で支出することとした．

来年度の予算は，今年度と大きくは変わらないが，活性化を促進するということで事業費・補助費関係を増額した．千葉大会の支出も大目に見込んで予算案を策定したが，収入増をはかるためには大会参加者を増やす工夫が必要である．

以上の決算案，予算案について了承した．

7．その他

・鉱物鑑定・干渉色表下敷き増刷について
残部30部程度，現在200部の注文．なお，広告スポンサーの明治テクノに確認したところ，追加1000部の依頼あり．前回どおり，ロゴ入れ５万円と，1,000枚販売20万円で受けた．
・理事会議事録の会員への広報について
ＨＰに掲載できるか？
オンライン委員会に会員用窓口を作成してもらえば，実施可能である．→オンライン化委員会に早急に実現すべく要請することとした．
・阿部なつ江会員から文部科学省とJAMSTECに対し，深海無人探査機「かいこう」ビーグル（子機）新造に関する要望書を，学会として提出してほしい旨の要望があり（要望書案添付），提出することとした．

2004年度第５回理事会議事録

期　日：2003年12月13日（土）
　　10：00～12：00
場　所：北とぴあ　901会議室
出席者：平会長，加藤副会長，渡部常務理事，運財-天野・大友・上砂，学研-伊藤・脇田，編出-狩野・会田，普教-公文・中井，井内評議員会議長，石渡同副議長，橋辺（事務局）
欠席者：木村副会長，玉生副常務理事（災害地質委員会開催），徐・宮下・吉田

報告事項

庶務関係（担当-天野）

・先に三宅委員長より伝えられていた，JABEEの活動資金への協賛金として，正式に10万円の割り当て（請求）が，世話学会の資源素材学会よりあり，今年度の予算から支払うこととした．

会計関係（担当-大友・上砂）

・今年度決算について
静岡大会の収支余剰金（90万円程度）について，年会準備金（積み立て）に繰り入れることとした．
・関東支部から印刷物「富士山」の売り上げ238,000円の寄付があり，普及出版費に繰り入れることとした．

The Island arc 連絡調整委員会（担当理事会田）

・来年度以降の契約更改について
これまで１年500万円→475万円との提案，これを承認して予算化することとした．学会ホームページからの直接リンクによるオンライン閲覧，印刷物による購読料はこれまでどおり．

科研費委員会（委員長―竹内　章）

・竹内委員長より今年度委員半数の候補者３名を選出したことが報告された．
井内美郎，松田博貴，小林哲夫

＜次回以降の理事会開催予定＞

04年１月21日（水）

議　題

1．評議員会議題の確認と整理

・移行措置における選挙についての，徳岡法人化委員からのコメントについて，内容の確認をした．とくに役員の固定化を防ぐために，理事については連続しては２期まで（３期目は候補者とはしない）とすることを申し合わせることとした．

また，選挙立候補者の情報についてホームページ上で逐次知らせるが，氏名等の公表はせず，現況人数のみにとどめることとする．

・評議員会での報告者，議題提案者の確認，議事進行について相談した．

2．学術会議より（小松会員経由），地質科学文書の収集に当たっての窓口となる人物の人選依頼が「International Commission on the History of Geological Sciences（INHIGEO）」からあった．

この件については地学史懇話会（代表鈴木尉元氏）に連絡をして適当な方を推薦していただくこととした．

2004年度第2回 定例評議員会議事録

2003年12月22日
日本地質学会　評議員会議長
井内美郎

日時：2003年12月13日（土）
13：00～18：00
場所：北とぴあ　901会議室
出席者：平　朝彦会長　加藤碩一副会長　井内美郎評議員会議長　石渡　明評議員会副議長
（03－04評議員）赤羽久忠　足立勝治　木村純一　斎藤尚人　佐々木和彦　佐瀬和義　鈴木徳行　田崎和江　新妻信明　廣井美邦　松田博貴　吉田史郎
（04－05評議員）阿部国広　井龍康文　榊原正幸　竹内　章　竹内　誠　仲谷英夫　髙本　格　松本俊幸　矢野孝雄
（理事）渡部芳夫　玉生志郎　天野一男　会田信行　伊藤谷生　上砂正一　大友幸子　狩野謙一　公文富士夫　中井睦美　脇田浩二
欠席　評議員（委任状）：荒戸裕之　片山郁夫　紺谷吉弘　柴崎直明　今岡照喜　黒田潤一郎　柴　正博　新井田清信　楡井　久　平野弘道　吉川周作
欠席　理事：木村　学副会長　徐　垣　宮下純夫　吉田武義
書記：足立勝治　木村純一

会長挨拶：開催に際して平会長より，9月に静岡大会で行われた第110年総会で新会則が承認され，今回は会長の諮問機関としての初めての評議員会となる．従来と同じく意見を積極的に出していただき，その内容を踏まえた学会運営をしていくことが表明された．

報告事項

Ⅰ　理事会報告

第1回理事会において，会長，副会長を除く理事の役割分担を下記のように決めた．

常務理事　渡部芳夫，副常務理事　玉生志郎，総務部会：部会長　天野一男，副部会長　大友幸子，上砂正一
学術研究部会：部会長　徐　垣，副部会長　伊藤谷生，脇田浩二
編集出版部会：部会長　狩野謙一．副部会長　宮下純夫，会田信行
普及教育部会：部会長　公文富士夫，副部会長　中井睦美，吉田武義
法人化担当：渡部芳夫，玉生志郎

1　運営財政部会（部会長-天野）

1）総務委員会

庶務関係（担当理事-天野）

天野担当理事よりつぎの報告があった．

(1) 選挙管理委員会委員として，小布施明子，坂本正徳，塚本　斉，手塚裕樹，宮城晴耕会員の5名を委嘱した．

(2) IUGSの新執行部役員の候補者として松本　良会員を推薦した．

(3) 生涯教育委員会柴委員長より，阿蘇火山博物館存続に関わる要望書提出の依頼があり，9月26日付けで下記のところへそれぞれ要望書を提出した．熊本県知事潮谷義子，熊本県阿蘇町町長　川崎敦夫，九州産業交通㈱　田上良輔

(4) 日本学術振興会が10月1日付けをもって独立行政法人となり下記のような機関名及び代表者名が変更となった．独立行政法人日本学術振興会　理事長　小野元之（旧　会長　吉川弘之）

(5) 3学会共同（物理・天文・地質）で総合科学技術会議に対し，科研費に関する要望書を11月4日付けで提出した．また，朝日，毎日，読売，日経の各新聞社に対しリリースした．11月7日付けの毎日新聞にこのことに対する記事が掲載された．

(6) つぎの他団体との共催，後援等を承認した．

1）第41回理工学における同位元素・放射線研究発表会，共催：（社）日本アイソトープ協会（2004年7月）．共催分担金3,000円，運営委員：角井朝昭会員（産総研）

2）2004年世界アスベスト東京会議，後援：2004年世界アスベスト東京会議組織委員会（2004年11月19日―21日，早稲田国際会場）

3）日本・東南アジア・環太平洋のインパクトイベントの国際シンポジウム，後援：国際シンポジウムIEJSAP'03事務局（2003年11月22日―24日，山口大学），会長のメッセージの要請があり送付した．

4）第42回原子力総合シンポジウム共催：（社）日本原子力学会同シンポジウム運営委員会（2004年5月）．

5）「第7回国際土壌・地下水環境ワークショップ」後援：（社）土壌環境センター（2004年1月22日，東京国際フォーラム）

6）第17回国際堆積学会議，共催：日本堆積学会，日本学術会議（2006年8月，福岡）

7）大友担当理事より，阿部なつ江会員から寄せられた「JAMSTECの深海探査ビークルが行方不明になっているので，これをつくり深海探査を推進して欲しい」との要請が紹介され，学会として文科省とJAMSTECに提出予定との報告があった．

以上の報告に対して次の意見が出された．

・田崎評議員：(5) については基礎科学に力を入れるようにして欲しいので学会のホームページ，ニュース誌に掲載するなど会員に対して注意を喚起して欲しい．

JABEE委員会（委員長　三宅康幸，担当-天野）

天野担当理事より①シンポジウム「諸外国における地質技術者資格と教育の実情と我が国におけるあり方」が11月25日，②JABEE主催　「JABEE審査員研修会」が2004年2月7日に予定されているので参加の呼びかけがあった．

技術者継続教育委員会（委員長・担当-公文）

とくになし．

自然史学会連合（運営委員　森田利仁）

11月29日の総会で次期連合代表として鎮西清高氏が選出された．

地質科学関連学協会連合と地理学関連学連合は報告なし．

会員関係（担当-上砂）

上砂担当理事から次の報告があった．逝去者に対して黙祷を捧げた．

(1) 次の入会者（正会員12名）を承認した（12月13日）．

正会員（6名）：井原　努，目代邦康，吉河秀郎，常深俊規，山崎唯史，横尾頼子，

正会員院生割引（6名）：加藤直子，吉岡翼，赤川史典，石川仁子，森　尚仁，山本真也

(2) 次の退会（賛助2社，正会員70名内院生割引5名を12月末で）を承認した．

埼玉県環境科学国際センター（2口）・エヌエス環境株式会社（2口）

相澤直人，青木謙一郎，浅見正雄，石井岳男，石田眞一，糸賀秋臣，井上　理，井門令子，岩淵義郎，宇井忠英，江頭裕美，生沼　郁，大岡弘一，大木達夫，大清水岳史，大西智恵美，岡井大八，尾形英雄，岡本和彦，岡山裕一，金子吾朗，金光勝明，国松　豊，熊崎健太郎，熊本智之，古城智子，小林晶子，小林久子，堺　理夫，佐々木寿，篠原邦彦，柴　達雄，庄谷幸夫，末岡正嗣，菅本尚子，杉末一政，杉村昭弘，杉山　健，高井浩深，高橋明子，高橋隆孝，田中謙一，田中　威・谷正巳，陳　毅風，出口信幸，寺島　滋，友田淑郎・西野真一郎，浜田成久，速水

格，深田　憲，藤沢恒雄，渕上芳孝，古江正敏，古川英照，邊見紗知，松浦旅人，松岡　功・松永正雄，松原　仁，松久幸敬・宮下　忠，矢入憲二，山口　信，山盛邦生，吉田博直，吉田栄夫，Glen McCrank，Liam　Nesfied

(3) 会員３名（名誉会員１名，正会員２名）が逝去された．

正会員：橋本隆夫（03年９月），正谷　清（03年６月），名誉会員：早川正巳（03年11月27日）

(4) 会費長期滞納による除籍予定者（名簿回覧）

正会員110名，2000年よりの会費滞納者，12月末までに入金がなければ除籍とする．

回覧資料の中で住所不明の方について，住所がわかる方がおられましたら学会事務局まで連絡が欲しいとの要請があった．

(5) 会員の動静（11月30日現在）

	賛助会員	名誉会員	正会員(内院生割引)	学生会員	合計
2003.11.30	41	76	4856(256)	41	5014
2003.8.31	40	73	4846(256)	39	4998
増・減	＋1	＋3	＋10	＋2	＋16

会計関係（担当-大友）

・2003年度決算見込みおよび2004年度予算案について説明があった．

２）広報委員会

News誌編集小委員会（担当-大友）

今回組織替えをし，地学教育担当から１名を委員に予定している（三次徳二氏が地学教育担当に決まった）．

・委員：高橋正樹，玉生志郎（地質災害），徐　垣，田口公則（生涯教育）

・2003年11月号（６巻11号）までを刊行し，12月号を校正中である．

インターネット運営小委員会（委員長　渡部直喜　担当-大友）

これから現状を整理して，次年度の委員を再編成する予定である．

２　学術研究部会（部会長　徐）

１）行事委員会（担当-徐，代理　伊藤）

(1) 静岡大会終了報告（準備委員会　狩野）

参加者総数999名，優秀講演（ポスター）賞：計11件

見学旅行：台風の影響でＢ班（天竜地域）中止，他班は実施した．

市民向け講演会：参加者は89名であった．静大生協より会計報告があり，収支は90万円のプラスであった．生協に委託したことで全体がうまく流れて，運営側としては良かった．この事例を千葉大会に活かして欲しい．

(2) 千葉大会（2004年9/18-20）総会・年会について（実行委員会　伊藤）

(3) 行事委員の交代

火山部会：高田　亮　→古川竜太，構造部会：原 英俊　→石川正弘

(4) 合同大会関係

・プログラム局員：安藤，プログラム委員：七山・久田

・資源地質学会のレギュラーセッション「岩石・鉱物・資源」のコンビーナーとして，岩石部会角替敏昭会員（岩石部会行司担当）を推薦した．

(5) 講演申込，講演要旨のオンライン化を検討（斎藤　眞，角替敏昭両委員を専門委員として推薦），オンライン化委員会より議題として提案．

２）専門部会連絡委員会（担当-伊藤）

伊藤担当理事より，「特になし」と報告があった．

３）国際交流委員会（担当理事，委員長　脇田浩二）

脇田委員長より，「特になし」と報告があった．

４）研究委員会

(1) 環境地質研究委員会（委員会会長　羽田　忍）

上砂委員からつぎの報告があった．第13回環境地質学シンポジウムが12月６日～７日に神戸大学発達科学部で開催された．副会長を新設し藤田　崇氏を選任した．本年度より環境地質学賞を設けた．第１回目の受賞者に藤井昭二，仲川隆夫の２氏を選出した．第14回シンポジウムからの投稿論文は査読審査部門：『論説』無審査部門：『報告』に区分する．論説希望者について査読をすることにした．

(2) ヒマラヤ地質研究委員会（委員長　在田一則）

報告事項なし

(3)「地質学と地震」研究委員会　（委員長　嶋本利彦）

報告事項なし

(4) 南極地質研究委員会（委員長　廣井美邦）

９月19日，静岡大学にて第29回南極地質研究委員会が開催され，以下の報告があった．

1　第44次（2002～2003）夏期観測について（愛媛大：川嵜智佑）

2　第９回南極地学国際シンポジウムについて（極地研：外田智千，愛媛大：川嵜智佑）

3　第46次（2004～2005）夏期観測計画について（極地研：本吉洋一）

4　第47次（2005～2006），48次（2006～2007）地学観測計画について（極地研：白石和行）

5　国際極年（IPY　：2007～2008）への取り組みについて（極地研：白石和行）

(5) 地質環境の長期安定性に関する研究委員会（委員長　高橋正樹）

報告事項なし

３　編集出版部会　（部会長　狩野）

１）地質学雑誌編集委員会（担当理事，委員長　狩野，副委員長　宮下）

狩野担当理事より全体として投稿論文が少ないので，現状を分析して対応を考えたいとの報告があった．

・2003年11月号（109巻11号）までを出版し，12月号の校正中である．

・本年度投稿論文数73編　昨年比　-12

・編集規約の一部改定

２）企画出版委員会（担当-吉田　代理　狩野）

・地質学論集刊行規定の一部改定

・企画出版委員会委員：高橋正樹・永広昌之・吉田他若干名

・藤原治氏代表者の論集「地震イベント堆積物－」刊行委員会へ編集委員として吉田理事を指定．

３）The　Island　Arc連絡調整委員会（担当-会田）

・来年度以降のブラックウェル社との契約更改について，現在話し合いを進めている．若干価格が下がるという予測である．

・アジア諸国の会員がオンラインで購読できるようにサポートを検討していく．

・学会ホームページからオンラインジャーナルへ自動接続する方法をとることも可能であるが，HPに会員向けのページを作る必要がある．オンライン化検討委員会等で検討してもらう．

４）The　Island　Arc編集委員会（担当-狩野）

・2004年１月から編集委員長を交代することとなった

（旧）巽　好幸→（新）石渡　明，

（旧）小川勇二郎→（新）Simon Wallis

・編集委員会規約を作成

５）地質学用語集出版委員会報告（坂　幸恭委員長，新妻信明）

新妻会員から次の報告があった．

専門部会からの推薦委員を加えて検討を進めており，2003年12月19日の委員会において最終案を検討し，2004年９月の千葉大会での出版販売をする計画である．専門部会推薦委員：秋葉文雄（層序），蟹江康光（地域地質），保柳康一（堆積），平野弘道（古生物），三宅康幸（火山），村田明広（構造），久保和也・高橋正樹（岩石），西村　昭（海洋），吉川周作（第四紀），岩松　暉・井上大栄（応用地質），上砂正一（環境地質），升本真二（情報地質），斎藤文紀（現行地質過程）

４　普及教育事業部会　（部会長　公文）

１）学校教育委員会（委員長　阿部国広，担当-中井）

・学校科目「地学」関連学会連絡協議会報告（委員　佐瀬和義）

２回／年開催している．中学校の教科書について，足りない内容を出してもらうようにしている．

次回に開催する際には，地質分野の足りない内容が中心に議論される予定．

・地球惑星科学関連学会「地学教育委員

会」（委員　阿部国広，担当-中井）
・地球惑星合同大会，地学教育委員会委員：阿部国広・中尾征三・芝川明義会員
・来年の特別公開セッションについての呼びかけに対し，地質学会として参画し，プレゼンをしていく方向で意志表示をする．
・戦略的に切り込む部分は理事会担当とし，現場の問題は学校教育委員会に対応してもらう．
・阿部委員より，つぎの報告があった．地学教育の課題などはまとめて千葉大会で取り組みたい．千葉大会の方針は①教育に関するポスターセッションを予定，②教師の巡検，③小中高大学を含めた「地学の普及と地学教育」のシンポジウム開催，④高校生の研究発表を他学会との連携で行う，⑤学校科目では中学校教科書がふさわしいかどうかなどに取り組みたい．学校教育委員会と地学教育の融合で1本化していく方向にしたい．
・田崎会員から理科ばなれ対策のため，教育界に提言して欲しいとの意見があった．
・新妻会員より国民の常識的な知識は小学校教育である．よって，小学校の教師を対象に考えていく必要があるとの意見が出された．
・平会長より，つぎのコメントがあった．阿部委員と中井担当理事が協力して取り組んでいることに感謝したい．この活動を継続してください．地球惑星科学関連学会の仕組みをうまく使って活性化して欲しい．

2）生涯教育委員会（委員長　柴　正博，担当-中井）
柴委員長より書面にて活動報告があった．
赤羽会員より，文部科学省科学研究費補助金の申請は，来年から民間でも申請することができるようになる．広報して欲しいとの意見が出された．
新妻会員より，博物館の閉鎖問題は，事前に現状と果たしている役割などを整理しておき，このような問題が生じたら即対応できるようにしたらどうかとの意見があった．

3）地質基準委員会（委員長　新妻信明）
静岡大会で「地質基準―地質学調査の基本―」を発刊した．内容などで何かご意見があればいただきたい．

4）地層名委員会（委員長　天野一男）
・地層名委員会はとくになし

5）フィールドジオロジー編集委員会（委員長　秋山雅彦）の天野委員より，全９巻のうち３巻の原稿が仕上った．近日中に発刊予定．200～250ページ／１冊の予定．

5　その他

1）その他-１（理事会報告）
渡部担当理事から「特になし」との報告があった．

2）その他-２（理事会関係の委員会報告）
支部長連絡会議（担当-玉生）
・連絡会は法人化に伴う支部のあり方と位置付け，災害調査対応について意見を聞くだけになっている．本日の午前中に会議をもった．
・支部長の交代
近畿支部：（旧）熊井久雄→（新）平島崇男（京大），四国支部：（旧）井内美郎→（新）吉倉紳一（高知大），
地質災害委員会（担当理事　玉生）
・緊急災害対応ブレインストーミング（10月30日開催）報告
・平会長より，法人化した時の社会的貢献としての明瞭な取り組みであるので，実績を持つ学会との連携や支部活動の一環として，災害直後の初動調査で地質記録をとっていけるようにしたいとのコメントがあった．

Ⅱ　各種委員会報告（評議員会関係）

1　各賞選考委員会（委員長　新井田清信，担当-伊藤）
・News誌12月号に各賞募集記事を掲載．

2　名誉会員推薦委員会（担当-委員長　加藤副会長）

3　科学研究費委員会（委員長　竹内　章，担当-公文）
竹内委員長より委員候補者選出の報告があった．

4　学術会議連絡委員会（担当-天野）

1）地質学研連（井内委員）
・19期委員14名は，下記のとおり（アンダーラインは地質学会推薦者）
小松正幸（学術会議会員，愛媛大学）・町田　洋（学術会議会員，都立大名誉教授）・井内美郎（愛媛大）・小山内康人（岡山大）・小坂和夫（日大）・笹田正克（産総研）・鈴木和博（名古屋大）・高木秀雄（早稲田大）・巽　好幸（海洋科学技術センター）・玉生志郎（産総研）・徳山英一（東大海洋研）・西脇二一（奈良大）・前田晴良（京大）・吉岡龍馬（同志社大）

2）鉱物学研連
なし

3）鉱物学研連鉱床学専門委員会
なし

4）地球化学・宇宙化学研連
なし

5）海洋科学研連（徐　研連委員）
19期委員は下記のとおり（アンダーラインは地質学会推薦者）
松山優治（東水大）・蒲生俊敬（北大）・竹内謙介（地球観測フロンテイア）・寺崎　誠（東大）・山口征矢（東水大）・川辺正樹（東大）・池田元美（北大）・松田治（広島大名誉教授）・伊藤　絹子（東北大）・前田明夫（川内職業能力開発短期大）・古谷　研（東大）・友定　彰・植松光夫（東大）・佐藤　義夫（東海大）・新野　宏（東大）徐　垣（海洋科学技術センター）・灘岡和夫（東工大）

6）国際学術協力事業研連
平会長より，海外では活動しているが国内では活動していない．学術会議には，在田氏を委員長としてお願いしたとの報告があった．

7）古生物学研連（八尾　研連委員）
19期委員11名は下記のとおり（アンダーラインは地質学会推薦者）
小松正幸（学術会議会員，愛媛大学）・大路樹生（東大）・小笠原憲四郎（筑波大）・小澤智生（名古屋大）・加瀬友喜（科博）・河村善也（愛知教育大）・北里洋（海洋科学技術センター）・鈴木三男（東北大）・辻誠一郎（国立歴博）・八尾昭（大阪市大）・山口寿之（千葉大）

8）地質科学総合研連
環境地質学専門委員会（田崎　委員）
田崎委員より委員会報告があった．（第１回委員会議事録　本誌別掲）
JABEEのシンポジウムへの参加要請があった．

9）環境理学研究連絡委員会
19期委員８名
（天文学分野：太陽活動）　柴崎清登（国立天文台野辺山・太陽電波観測所），（地球物理学分野：超高層・高層）　藤井良一（名古屋大太陽地球環境研），（地球物理学分野：気象・雪氷）　藤井理行（国立極地研），（地質学・第四紀学分野：地質時代）　増田富士雄（京大），（気候学：観測時代）　三上岳彦（都立大），（生態学分野）東　正剛（北大地球環境科学），（人類学分野）　大塚柳太郎（東大），（自然地理学分野）　野上道男（日大）

10）IGCP専門委員会
なし

5　地学教育委員会（委員長　佐瀬和義，担当-中井）
佐瀬委員長よりつぎの報告があった．
・学校教育関係の委員会は，メンバーが重なっているので，役割分担などから中井担当理事と協議して実質的な活動ができるように変えていきたい．

6　女性地球科学者の未来を考える委員会（委員長　田崎和江）
・静岡大会での女性地球科学者へのご配慮について感謝する．千葉大会についても同じようにお願いしたい．
・大学では女性の非常勤講師を減らすことがなされている．女性科学者の採用をお願いしたい．理工学部は女性が少ない．女性を増やすとレベルが落ちるということをインターネットで流されたことがあった．これに抗議して，すぐに取り下げさせたことがある．

・新妻会員より，政府の方針に女性を増やすことが上げられている．これに対応した提言をつくり対応していくようにして欲しい．また，静岡大学では女性の院生が多く，野外調査には女性が不利との意見があった．
・大友会員から，女性教官比率を引き上げる目標値（平成12年５月19日の国立大学協会の提言では20%）は，博士課程在籍女性院生の比率が目安になっているとの報告が出された．
・中井会員から海洋分野の現場にいく女性科学者も多い．子供を預けて調査にいけるようなことも考えていく必要があるとの意見が出された．

7　研究企画委員会
なし

8　法人化準備委員会（委員長　木村　学，担当理事　渡部，玉生）
立石委員より，書面により委員会報告があった．
加藤副会長から，法人化に向けての募金がおよそ500万円に達した事が報告された．目標額である2000万円確保に向け，支部長にも委員に加わってもらうこと，会員数の多い機関に依頼する等の対応をとることを承認した．

9　倫理規定策定委員会（松本　良委員長，担当理事　伊藤）
なし

10　知的財産権等検討委員会（上杉　陽委員長，担当-伊藤）
なし

11　オンライン化検討委員会（鈴木徳行　委員長）
・年会オンライン化実施計画について鈴木委員長より報告があった．

Ⅲ　選挙管理委員会（手塚裕樹委員長，代理渡部報告）
・11月21日に第１回選挙管理委員会を開催し，互選で手塚裕樹氏を委員長に選出した．
・2004年度の選挙について理事会案の検討を行い，委員会としての感想や意見を提出した．
・選挙管理員会規約の作成

Ⅳ　その他の報告
１．今後の評議員会の開催予定，日時・会場について
04年３月27日（土）13：00〜18：00
北とぴあ　決定
04年４月26日（土）13：00〜18：00
北とぴあ　決定
04年９月17日（金）13：00〜18：00
千葉または東京　予定

議　題
１．新会則による役員の任期等について
２．新会則による選挙の実施について
（１．２同時審議）
平会長より主旨と経緯の説明があった後，渡部常務理事から法人化に向けた移行に伴う，選挙の手順について提案があった後，以下の審議内容について議論が行われた．
審議内容
(1) 2003年度選出評議員の任期を2004年９月までの１年のみとする
(2) 2004年９月の千葉大会に向けて代議員選挙を一斉に行う．その際1.5年任期と2.5年任期代議員を同時に選出する．代議員は各任期について全国区100名，地方区100名になる．
(3) この代議員の中から，理事14名（各任期７名ずつ），評議員40名（各任期20名ずつ）を選出する．
・立候補者不足の対策について質問があり，理事会として事前の宣伝や支部への働きかけ等に取組むことが回答された．
・支部選出の評議員がいないと，大会などの実務が滞る可能性が指摘され，必ず各支部選出の評議員を選出する方策を講ずる必要があると提案がなされた．各支部選出の評議員の意見等を受けた後，院生枠，教員枠，企業枠などの選出が終了し，高得票者から順位をつけたのち，選出された評議員が支部をカバーいていない場合に限り，当該支部の代議員候補者のうち最上位得票者を繰り上げ当選する事で合意された．確認内容は選挙規約等に反映させる事とし，対応は理事会に一任することを了承した．
・現行評議員の任期の短縮について，賛成多数で承認した（賛成46/48）．
・選挙公示までの手順と日程について，全会一致で承認した．
・選挙方法改訂に伴う「選挙細則」の変更について審議の後，上記の議論によって発生した修正を行った後，採決し，全会一致で承認した．
・「選挙内規」案について渡部理事の説明の後，立候補届出用紙の年齢欄を削除，専門部会欄の追加，記載必須事項の検討を行った後，挙手にて採決を行った結果，全会一致で承認された．

３．科研費委員会委員の改選
竹内章委員長から，委員の半数改選について，その経緯と結果が報告された．
選出された新委員（任期２年）は，井内美郎，松田博貴，小林哲夫会員．留任は君波和雄，竹村恵二，横田修一郎，三宅康幸の各会員．
・委員の分野間のバランスをどうするかについて，竹内委員長から意見聴取の要望があり，地質学細目以外で細目のある古生物関係の会員の扱いなどについて意見が交わされた．また，委員の選出について内規を作ったらどうかとの提案があり，承認された．具体的な検討は委員会に一任された．

４．新設委員会の規約制定および選出委員について
・法務委員会
渡部理事から法人化移行に伴う組織改編に派生する日本地質学会各種委員会規約文言の変更および，法務委員会の新設について提案があった．提案は全会一致で承認された．

５．千葉大会について
伊藤理事から千葉大会の学術セッションについての提案と，講演予稿集の査読体制確立についての提案があった．
・千葉大会では，定番セッションはポスタープレゼンテーションを中心として，30セッションで300件の口頭発表，450件のポスターとしたい．そのかわり，地質学会の新たな門出にふさわしいシンポジウムを６件提供したいとの提案に対して，会場の利便性についての確認があった後，全会一致で承認した．
・講演予稿集は，今後すべての大会にあたり，コピーライトを確保するためと，そのために予稿集をオーソライズする目的で査読を行うように変更したいとの提案があった．これについて，査読体制についてはだれが行うのかとの質問があり，セッションコンビーナーと行事委員会が責任を負ったらどうかという意見があった．また，講演登録のオンライン化に伴い，講演申し込み日程に変更があるので，具体的な講演申し込み方法，査読体制とその基準や責任の所在などについて，理事会で議論を進め，次回評議委員会で提案を行う事が承認された．

６．その他
１）2003年度決算見込案および2004年度予算案について
・大友理事から決算見込み案の内容について提案があった．予算案は上砂理事から説明と提案があった．決算見込み案ならびに予算案を個別に審議し，若干の議論の後承認した．佐々木理事から，近年の予算状況について，赤字体質は改善されていると報告があった．これに伴い，上砂委員より予算計上の必要な事項については，積極的に提案してほしい旨の要請があった．
２）年会のオンライン化実施計画
講演申込み，講演要旨のオンライン化について，鈴木委員からWEBサイトデザインの原案について提案があり，承認された．
３）地質学雑誌のあり方について
平会長より，木村副会長の提案について紹介があり，その主旨を活かす方向で地質学雑誌編集委員会に検討を依頼した．また，オンライン化計画等長期的な問題を検討するため，「地質学雑誌のあり方を検討する委員会」（委員長：加藤副会長，委員：宮下会員）を設立する事が提案された．日本語のレビュー論文を強化するなどして検討したら良い等の意見が出た後，全会一致で承認された．

産業技術総合研究所 地質調査総合センター(旧地質調査所)発行地質図類の販売

【地 質 図 幅】1：50,000 地質図幅、1：200,000 地質図幅、1：500,000 地質図幅
【広 域 地 質 図】1：2,000,000 地質編集図、1：1,000,000 地質図・ほか
【各種シリーズ】数値地質図（CD-ROM）、活構造図、火山地質図、特殊地質図、海洋地質図、水理地質図、鉱物資源図、重力図、日本炭田図、地熱地域等重力線図、日本油田・ガス田図、空中磁気図など

ご要望によりカタログを差し上げます。
在庫切れ古書の取り扱いもいたします。

地質図・地球科学文献コピー代行
地球科学論文・文献の翻訳
地球科学文献検索
データの計算機入力及びワープロ入力
地球化学分析（XRF・EPMA）取次
その他地学情報に関連する事業、ご相談ください。

迅速・確実!!

地学情報サービス　株式会社 GSIS

代表取締役社長 垣 見 俊 弘

〒305-0045 つくば市梅園2丁目32-6
Fax 029-856-0568
Tel 029-856-0561
E-mail : gsis@kb3.so-net.ne.jp

Geoscience Information Services Co., Ltd.
Home page : http://www008.upp.so-net.ne.jp/gsis/gsis-J.htm

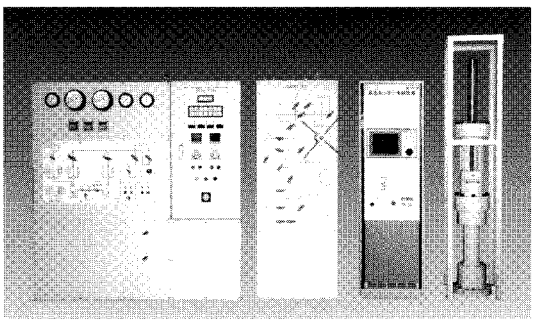
■高温高圧変形実験装置

ISO14001 認証取得

地下6kmの高温・高圧・熱水条件を再現し、
岩石の三軸変形試験及び透水試験を行ないます。

●特　長

・ガス圧式のため容易に高温が得られます。
・アルゴンガスを用いておりますので、岩石資料等に腐食などの悪影響がありません。
・内部加熱炉を用いておりますので、岩石資料付近を局所的に加熱することができ高温でも安全に実験をおこなえます。
・間隙圧媒体としてガスと液体(水)を用いることができます。
・付属品に資料セットアップ治具、資料用ジャケットが用意されております。
・既設の岩石圧縮試験機に取り付けて使用できます。



株式会社 鷺宮製作所　〒165-8907 東京都中野区若宮2-55-5
試験機営業部　埼玉県狭山市笹井535番地 TEL.042-953-3114㈹ FAX.042-953-3116
URL : http://www.saginomiya.co.jp　E-mail : dynamic-servo@saginomiya.co.jp

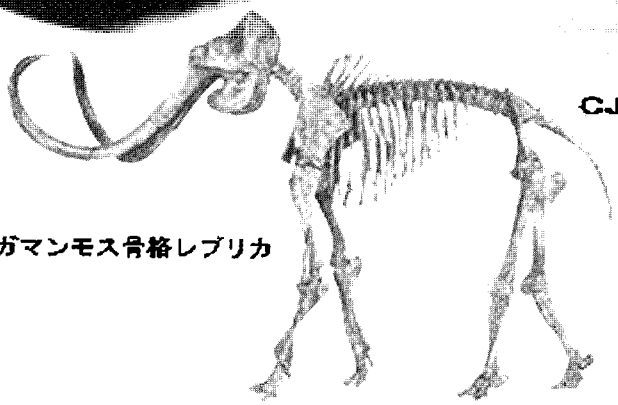
鉱物・古生物から分析用標準試料まで

ゼネラルサイエンスは幅広くご要望にお応え出来ます。

地球化学標準試料（GSJ）お取り扱いのお知らせ
旧地質調査所の地球化学標準試料(GSJ)全種類を
弊社で委託販売する事になりました。

中国砂漠系標準試料(黄砂・黄土):販売のお知らせ
世界初の黄砂・黄土の元素分析標準試料です。
大気ｴｱﾛｿﾞﾙ・堆積土壌中の組成分析に使用出来ます。

CJ-1,2（２本組）



ケナガマンモス骨格レプリカ

☆ 弊社では、学校教育用・研究用及び博物館展示用の実物化石標本・模型、動物骨格標本・模型、恐竜骨格標本・模型、化石人類模型等世界中の標本・模型を取扱っております。
アメリカ自然史博物館・大英自然史博物館・ケニア国立博物館・国立南オーストラリア博物館等で出しておりますオフィシャルの模型も取扱っております。ご興味がございましたら是非ご一報下さい。弊社よりご要望のカタログをご送付させていただきます。尚、納入実績としましては国立科学博物館を初めとして、全国の博物館・大学に納入させていただいております。

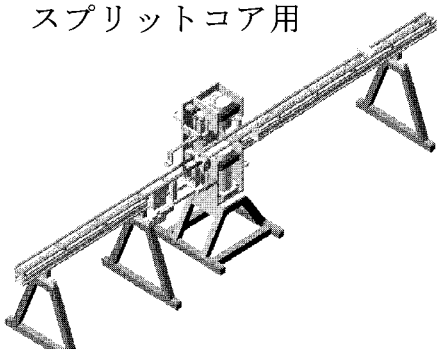
☆ 分析用標準試料については、上記標準試料の他に、NIST、CANMET、SABSC(MINTEK)、BCR 等の鉱物・鉱石標準試料をはじめ、いろいろな標準試料を多数取り揃えております。

お問合わせ・資料ご請求は下記までお願い致します。

株式会社 ゼネラルサイエンス コーポレーション
〒107-0052
東京都港区赤坂 3-11-14 赤坂ﾍﾞﾙｺﾞﾋﾞﾙ 802
TEL.03(3583)0731　FAX.03(3584)6247
e-mail:gsc@shibayama.co.jp http://www.shibayama.co.jp

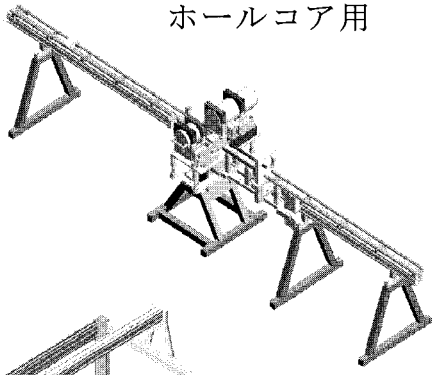
GEOTEK　マルチセンサーコアロガー

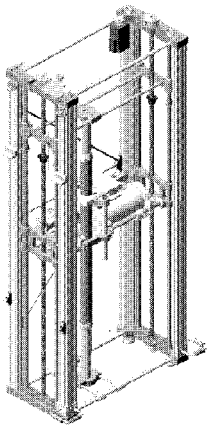
スプリットコア用



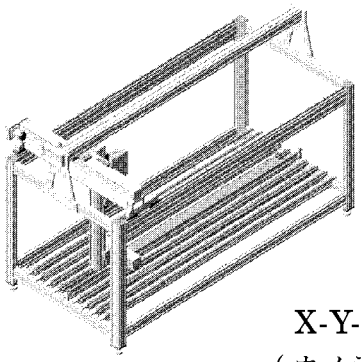
Core diameter
P-wave
Bulk density
Mag sus
Electrical resistivity
Natural gamma
Core image

ホールコア用





軟質コア用



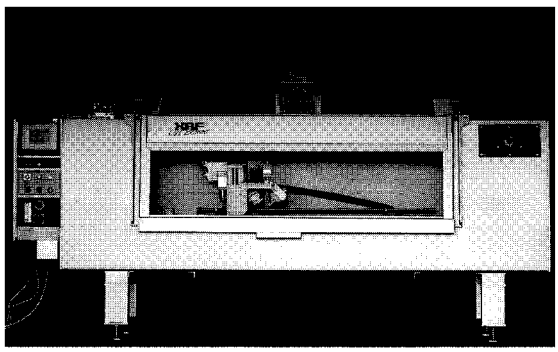
X-Y-Z テーブル
（カメラ・測色計用）

GEOTEK

TECH
ANALYTICAL X-RAY TECHNOLOGY

TeKa

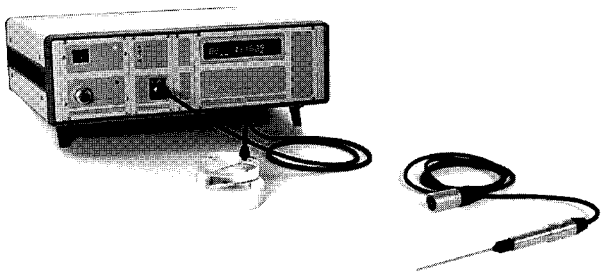
蛍光X線コアロガー MKII



(Original name is CORTEX from NIOZ)

(Al), Si ……. Ba

TK04 熱伝導率計



Range: 0.1-12W/mK(VLQ)
0.3-12W/mK(HLQ)
Accuracy: +/- 5% <(standard)
+/- 2% <(high)
Linearity: +/- 1.5% <

REC
(有)オーレック
Phone;042-566-5977
URL;http://www.orec-ltd.com
E-mail;toshiszk@tka.att.ne.jp

研究室のミニ工場

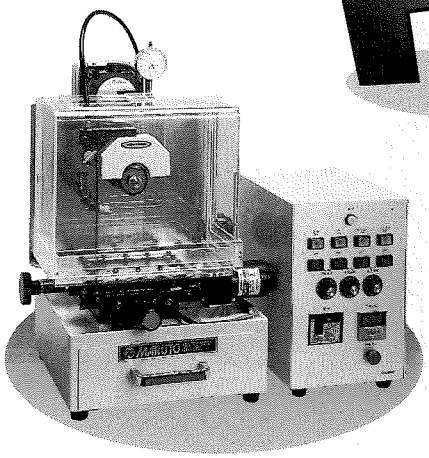
マルトーの ラボ・ファクトリープラン 3点セット

分析・検査用試料作製機器
〈切断・研削・研磨〉

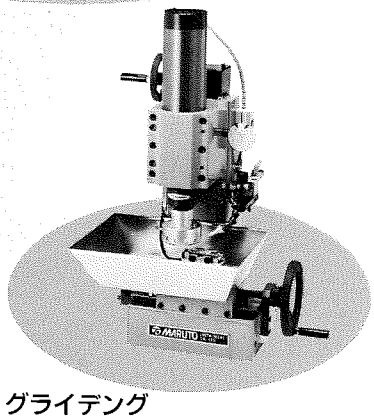
小さな機械(なり)だが役に立つ

小型 精密 操作簡単 低価格

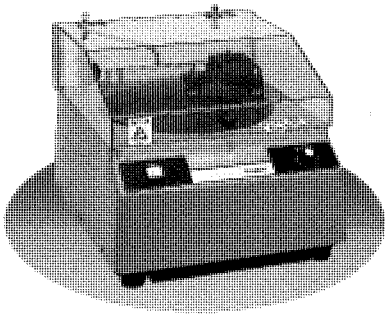
3機種揃えば、各種試料の精密加工が可能です。
(ガラス・水晶・シリコン・セラミックス・鉱物・金属材料などの加工)



カッティング
連続・浅切込みができる
ステップカッター
〔MC-170Y〕
- 試料へのダメージが少ない
- 最小切込み量 10μm／pass
- 最大加工能力 H25×L40mm
- 設置面積 W550×L450mm
- 本体価格 185万円～



グライデング
立軸平面研削機
プレパラップ
(MG-300)
- 最小切込量は、0.01mm目盛
- 加工サイズは、MAXφ50mm
- 任意研削面の逐次観察が可能
- 研削・研磨、同一治具使用により、研削・研磨工程は簡単で高精度
- 設置面積 W560×L380×H640mm
- 本体価格 98万円～



ポリッシング
精密鏡面研磨機
ドクターラップ
〔ML-180〕
- 組織検査用試料のラッピング・ポリシング
- アクセサリー豊富
- 研磨試料サイズ φ1～φ100mm
- 設置面積 W400×L400mm
- 本体価格 45万円～

☆貴重な試料を無駄なく手軽に加工したい、各種カタログあります。開放実験室でテスト加工が可能です。

材料を 切る・削る・磨く そして 測る 技術で奉仕する

株式会社マルトー

本　社／〒113-0034 東京都文京区湯島1-1-10
☎東京(03)3251-0727(代表) FAX:東京(03)3251-2478
福岡連絡事務所／〒815-0033 福岡市南区大橋1-21-5 岩田ビル
☎福岡(092)512-2755 FAX:福岡(092)561-4288

E-mail:maruto@maruto.com http://www.maruto.com

©日本地質学会　〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-15　井桁ビル6F　電話03-5823-1150
Fax 03-5823-1156　E-mail：main@geosociety.jp　ホームページ：http://www.geosociety.jp